

---

# **金色の陽と透き通った青空**

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金色の陽と透き通つた青空

### 【Zコード】

Z2293V

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

軽井沢の深い森の中に佇む中世ヨーロッパ風の小さなガーデンハウス・・・。ここは、若い女店主一人で切り盛りする、焼き菓子のお店だった・・・。その女性には悲しい過去があった。愛の無い政略結婚、愛の無い結婚生活、殆ど顔を合わせた事の無い夫、一方的に突きつけられた離婚届け・・・。

自分にはなにも無かつた・・・死のうと思つた・・・。

その翌朝、窓から差し込む金色の温かい光・・・窓を開けて見上げたら、どこまでも透き通る青い空が目に飛び込んできた。

あまりにも美しくて、心が洗われて、生きようと思った。  
そして何もかも捨てて、この場所にお店を開いた。.  
そんな時に元夫であるあの男が自分の前に姿を現した。  
。

## 第1話 森の中の小さなガーデンハウス

軽井沢の緑の大変美しい、静かな森の中・・・。

金持ちの別荘地としても有名な所で、中には軒々と大きな屋敷が何んでいたが、その中にポツンと、絵本の中から抜け出たような小つちゃな中世ヨーロッパの片田舎風のガーデンハウスが立っていた。

禿げてレンガの下地が見えるしつくいの壁に、あるいは葉のまめつたがはっている。

こけら葺き（木を何枚も重ねて葺いたもの）の屋根に、黒いブリキの煙突・・・。そこからゆらりゆらりと白い煙が上がっている。

手作りガラスの可愛いガラス窓は、下から持ち上げて木で支えて上げる形で、白い手作り風のカフェカーテンがフワリフワリと優しい風に踊っている。

その窓には飾り鎧戸がついていてその下にはアイアンの花置き台がついていて、鉢植えの素朴な花が揺れている。

屋根のすぐ下の丸い嵌め殺しの窓は、カラフルなガラスのステンドグラスになっている。

木の枝風の持ち手に、重厚なロートアイアンの金具の付いたブルーの板壁風ドアを開けると広さは6畳ぐらいの小さなスペースで、床はアンティークな焦げ茶色のフローリング、白のしつくいの壁に、壁面上部には廃材風の素朴な木の飾り棚がついていて、お手製のカントリー人形が並んでる。その下には手作りリースや、アンティークな額に入ったモノクロの写真も飾られている。

出入り口ドアの脇には、素朴な木のスツールが置かれていて、その上にはブリキの水差しに生けた、朝摘んだ野の花が飾られていた。

中に入つてまず目に飛び込んでくるのは、大きなガラスショーケー

ス . . . 。

そして、部屋中に広がる甘い焼き菓子の香り . . . 。  
ガラスショーケースの中には長方形の籠に、色々な種類の焼き  
菓子が並んでいて、陳列されていた。

そう . . . こは焼き菓子のお店で、若い女店主一人で、お菓子を  
焼いて販売している、知る人ぞ知る焼き菓子の美味しいお店だ . . .

そのお店の名前は、『森の中の小さな焼き菓子のお店 アンジュ』。

クッキー、パウンドケーキ、フィナンシエ、マドレーヌ、マフィン、  
シフォンケーキ、ロールケーキ . . . 。

お店に並ぶ焼き菓子は、昔ながらの素朴で、甘さは少し控え目で、  
どこか懐かしく優しい味 . . . 。

一度食べたら、また食べたくなるそんなお菓子達だ . . . 。  
一人で切り盛りしてるから、焼き菓子の数もそれ程大量には作れず、  
普段は10時にオープンして、お昼前後で完売してしまう。お天氣  
の悪いお客さんの少ない日でも、大抵午後2時には完売してしまう。  
入れてくれる袋もとても可愛らしい . . . 。

地味な筋入りの茶色いクラフト紙の袋に、手作りの消しゴムハンコ  
で押した、可愛い絵柄付き。ちょっとレトロな懐かしい雰囲気の袋  
. . . 。

ギフトセットの焼き菓子詰め合わせは、一ヶ月前に予約しておけば  
何とか手に入れる事が出来る . . . 。

味を落としたくないので、一日に焼く数量も決めている。

ラッピングもとても可愛く、ギフトセットはとても喜ばれて大好評  
!!

オススメは、店長お任せ焼き菓子セットと、ひとつひとつ「コレー  
ションした食べるのが勿体ないぐらい可愛らしいクッキーセット、  
手作りジャムセット、店長のセレクトした茶葉もセットになつた午

後のお茶セツトも人気商品 . . .

口の中でほんわりととろける、ほろほろクッキーセツトも好評だ。

オープンしたての頃は、ネット販売もしていたが、今は、お店に来るお客様に販売の分で精一杯で、お店のHPは不定期に更新される店主ブログと商品情報のみ公開中。

このブログがまた大人気で、ランキング上位にも何度も登場する程だ。

こここの若い女店主は25歳 . . .

とても綺麗な女性だつた . . . 何処か育ちの良さを感じさせられる所作 . . . 色白で大きな澄んだ瞳に長いまつ毛 . . .

長いサラサラの髪を後ろでショシューで一つにまとめて、お手製っぽいナチュラルなリネンやコットンの服に、同じくお手製っぽい三角巾と可愛いエプロンドレスを付けて . . . 物腰がソフトでとても優しそうな雰囲気の女性。

お店の名前は、その女性の名前が『杏樹』だかららしい . . .

こんな素敵なお店の素敵なお店主さんには、悲しい過去があつた . . .

左手首にある切り傷の跡 . . .

誰もがお菓子作りの時に誤つて切つてしまつた傷だと思ってるし、女店主もそのように言つていたが . . .

本当は悲しい過去の傷跡だつた . . .

(第2話に続く)



## 第2話 愚かな夫・失つて初めて気付くこと（前書き）

今回は血の要素の含む重苦しいシーンがござります。  
この言つた表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになつて下さい。

## 第2話 愚かな夫・失つて初めて気付くこと

海藤リゾート・・・自然環境を保全、保護しながらホテル事業や別荘開発などのリゾート事業を幅広く運営、急成長を遂げた、リゾート事業の大手企業・・・。

そこ娘が杏樹だつた・・・。

そこ会長である、海藤隆から娘、杏樹との縁談を持ちかけられ、大手総合商社の総帥、玖鳳翔馬の命で、孫であり玖鳳グループの社長でもある、玖鳳智弘は杏樹と結婚した。

智弘26歳、杏樹21歳だつた・・・。

・・・・・愛のない結婚だつた・・・。

生まれながらにして玖鳳グループを背負つていかなくてはならない運命・・・。

父親を早くに亡くし、玖鳳家の血筋を受け継ぐ物は、智弘ただ1人・・・。

幼い頃より帝王学を学び、厳しく育てられて、結婚も勿論総帥の決めた相手と結婚するのが当たり前なのだと思った。

愛などと言ふ物は知らなかつた・・・。大企業を率いる者にとって、そんなものは必要なかつた。

妻は添え物・・・それなりの家出身で、学歴は高すぎても好ましくない・・・下手をしたら自分に刃向かつたり、事業に口を挟んだり、会社にとつてマイナスになる事態になる時もある。それなりの学歴で、それなりの教養があり、大人しく従順で、自分の子孫を残す役割を果たせばいい事だ。自分の母親の様に・・・。

母の事は微かに覚えているだけだ。

父が事故で亡くなつてから、総帥の命で玖鳳家を追い出された。

元々玖鳳家にはうんざりしていたようだつた・・・文句も言わず、

すぐに出でていった。俺が3歳の頃、だつた。

その後、風の便りで再婚して幸せに暮らしていると聞いた事があった。

相手の男性は、あまり特徴もない、大して財産もない一般的の男性だつたようだ。

今は行方も分らず、捜そうとも思わないし、何の感情も持つてない。

。

杏樹は総帥が見込んだだけあつて、大人しい従順な女性だった。何の特徴もないつまらない女。

ただ、子孫を残す為に時々屋敷に戻つて来て、一緒に一晩明かす。

あとは、自分の隠れ家的なマンションに戻つて、気ままな一人暮らしを楽しんでいた。

隠居して、別宅に住んでいる総帥はこの事は知らない。敷かれたレールの上を淡々と進んでいかなくてはいけない自分の運命にある日虚しさを感じ、密かに隠れ家を手に入れ普段はそこで暮らしていた。

俺は思つていた。総帥が玖鳳グループから完全退陣したら、俺のやりたいようにさせてもらうと。

その日を。その日だけを心の支えに待ち望んでいた。

。ある日、とんでもない事件が巻き起こつた。

杏樹の父親が反乱を起した。ただのリゾート開発企業の子トラの分際で、うちの社にM&A（企業買収）を仕掛けてきた。

事前にこの兆候は、わが社の株の動きで察知していた。

予め用意していた、海藤グループのリゾート開発誘致不正買収の情報入手、その情報をマスコミに流し、それが火だねとなつて、海藤隆也と杏樹の兄であり社長である海藤雅也かいとうまさやは逮捕、失脚。

弱小化した海藤グループを手中に収める事に成功した。

今回の件で怒り狂った総帥は、杏樹を屋敷から追い出し、小さなマンションに住まわせた。

そして総帥の支持で秘書が離婚届を用意し、そのマンションを訪ね、杏樹に署名捺印させた。

これでジ・エンド。。。

だが・・・おれは、その離婚届を秘書から奪い取り、シュレッダーにかけ処分した。

結婚も離婚も総帥の一存で決められる事に、うんざりしていた。。。

。その反抗心から、離婚届を廃棄した。

そしてこいつそりと杏樹の住まわされているマンションを訪ねた。

インターホンを何度も押したが反応はなく、何気なくドアノブに手をかけたら、鍵はかかってなく楽々部屋に入る事が出来た。  
小さな1LDKの何もない質素な部屋だった。。。そして杏樹はいなかつた。。。

寝室に入つてベッドを見て驚愕した。。。

慌ててシーツを引きはがして処分した感じで、ベッドマットレスにはカバーもなく、剥き出しの状態だった。

そこに、かなり出血したのか、マットレスに血が染みて茶色く変色していた。

ごみ箱をあさつたら、口をきつく締めたビニール袋から、真っ赤に染まつたシーツや血で染まつたパジャマやナイフも出てきた。。。

- - - - 死のうとしたのか？

これを見て初めて心が痛くなり、苦しく思つた・・・。

その時に、自分には心がある事を感じた・・・。

杏樹はどこにいるのか？ 大丈夫なのか？

あらゆる機関を使って、杏樹の行方を調べた。

数日して、手首を深く切つたが命に別状はなく、数針縫う治療を受けている事が分った。

その病院で、心療内科を受診するように勧められたが、行かなかつたらしい・・・。

その後の行方は全くつかめなかつた。

(第3話に続く)

## 第2話 愚かな夫・失つて初めて気付くこと（後書き）

この場面だけは重苦しい雰囲気になります。

重いシーンはこの部分のみと、少し後の方に出て来る、主人公・杏樹の回想シーンのみの予定です。

### 第3話 それから3年

杏樹の行方は全くつかめなかつた . . . 。

総帥は俺が離婚届を破棄した事に大変激怒したが、大人しく従順だつた孫が、初めて自分に逆らつた事にかなりショックも受けた様子だつた . . . 。

「杏樹の事はお前に任す」と一言囁つただけでその後は不問に終わった . . . 。

こうなる前に、もつとどうにか出来無かつたのかと自分を責めた . . 。 総帥にも非があるが、己自身も同じように非があつたのだと今頃になつて気がついた。

愛情なのか執着なのか . . . 彼女に対するただの興味なのか . . . これ以上自殺騒ぎを起されたくないと言つ保身の為なのか . . . 自分でも良く分らないが、気になつて仕方がなかつた . . . 。

3年が経過した頃だつた . . . 。

秘書が、ノートパソコンを抱えて、血相を変えて社長室に飛び込んできた。

「社長 . . . これを見て下さい . . . 」

秘書の持つてきたノートパソコンを見て驚いた . . . 。

それは軽井沢の高級リゾート別荘地の森の片隅にある、小さな焼き菓子店のHPだつた . . . 。

トップページは森に囲まれた中に佇む、絵本の中から抜け出たような小さなガーデンハウスのような店舗写真。

店内の写真や、焼き菓子類の商品の紹介 . . . 店主紹介欄には杏

樹の顔写真と、プロフィールが書かれていた。

名前は旧姓の『海藤杏樹』になっていた . . .

今でも君は、玖鳳杏樹なのに . . . ”海藤杏樹” だつて？

幸せそうに笑つてゐる写真だつた . . .

この写真で初めて彼女の笑つてゐる顔を見た。

お日様の様に温かな笑顔 . . . 彼女の笑顔を見て気持ちがモヤモヤした . . . 僕にはこんな笑顔を見せてくれなかつたじゃないか！！！その笑顔が可愛くて、優しくて . . . 何故だか切なく悲しい気持ちになつた . . .

店主ブログには、軽井沢でのほのぼのした生活の様子などが書込まれていた。

定休日は毎週水曜日 . . . 月2回、その水曜日に、手作りの服や小物などを、店舗横の小さな庭でヤードセールを開くらしい . . . クッキーや保存の利くパウンドケーキのネット販売をしてる事を知り、洋酒漬けドライフルーツのパウンドケーキとクッキー詰め合わせを、偽名で注文してみた。

注文した商品は、1週間後に杏樹の知らない僕の隠れ家に使用しているマンションに届いた . . .

あのガーデンハウスのような店舗の写真のついたポストカードと、心のこもつた手書きの礼状カードが入つていて。

彼女の書いた字を初めて目にしたような気がした . . .

少し丸みを帯び、女の子らしい柔らかな雰囲気も漂つてゐるが、流れるような美しい綺麗な字だった . . .

クッキーは一つ一つ可愛らしい絵柄のついたクリスタルパックに包装されていて、ピンクのギフトボックスに入つていて。

子供や若い女の子が喜びそうな、綺麗にデコレーションされた色々な形のクッキー . . .

ひとくち食べて見たら、今まで食べたどのクッキーよりも美味しい

と思つた . . .

高級洋菓子店のよつのとは一味違ひ、お母さんの手作りのよつなりでいてひとくち食べたら忘れられない味 . . .

甘さは少し控え目だけれど、美味しい . . . 体の中に優しさが広がっていくよくな味と言つのだろつか . . .

厳選した材料で、丁寧に心を込めて一生懸命作つたのが伝わつてくる . . .

パウンドケーキも凄く美味しかつた . . .

どきつい甘さじやなくて、洋酒が主張しそぎずに程よく利いていて . . . ふんわりしつとりしてこれもまた忘れられない味 . . .

杏樹にこんな才能があつたなんて!!

素晴らしい人だと思った . . . そして . . . 僕はなんて大ばか野郎なんだと思つた . . .

HPの店主ブログにはコメントも入れられるようになつていた。

今日のブログは、庭に植えてあるハーブで作るお茶のお話し . . . 朝摘んだレモングラス、レモンバーム、スペアミントをティーポットに入れて、熱い湯を注いで作るフレッシュユハーブティーの話しが書かれていた。

画像は庭にあるガーデンテーブルに、耐熱ガラスのティーポットに入つたフレッシュユハーブとガラスの耐熱グラスのティーカップに、小皿に載せたハーブクッキーがHPされていた。

俺は、”フル”というハンネで、『自家の庭で採取したハーブティー、いいですね。どんな味のするお茶なのか? とても気になります。』と記入した。

”フル”的意味は、英語で” fool ” ばか者という意味だ . . . 俺にピッタリなネームだと思つた。

数日後、彼女から返事が書かれていた。

『 フール様 あのフレッシュハーブティーの味ですが . . . サツ  
パリと爽かなお茶です。氷を入れてアイスにしても美味しいですよ  
！宜しかったらお試しになつて下さいネ』

杏樹からの返事が凄く嬉しかつた . . . 。

遠い手の届かない所に行つてしまつた杏樹と、ほんの一瞬だけれど、  
また繋がる事が出来た . . . 。

それがとても嬉しかつた . . . 。

その翌日、ドライでしか入手できなかつたが、早速あのハーブを購  
入して、ティーポットに入れて湯を注いで飲んでみた . . . 。

「うーん . . . 」こんな味なのかな？ちょっと違う感じもする . . .  
。ドライではあの写真の様に瑞々しく青々としてないし . . . 。  
慣れない味なのか？それ程美味しく感じなかつた . . . だが、彼  
女に少し近づけた気がした。

- - - - 杏樹 . . . 無性に会いたい . . . 。

会いに行つても拒絶される事は分つていても、会いたくてたまらな  
かつた。

(第4話に続く)

## 第4話 メル友

杏樹に会いたいが、あんな酷い仕打ちをして、会えるはずがないし、会う資格もない。

だが・・・。何か繋がりが欲しかった・・・。

HPの彼女のプロフィールの最後には、お店のメールアドレスが書き込まれていた。

焼き菓子注文の為や、店舗の問い合わせなどの為に載せているのだと思うが、一か八か他愛ない内容だがメールを書いてみた。

\* \* \* \* \*

杏樹様

いつもお店のブログを楽しみに拝見させていただいております。

先日焼き菓子を注文し、届いたその日に頂きましたが、とても美味しくて感動しました。

すぐにもまた注文したい気持ちです。

ところで、あのブログのハーブティーが気になり、無性に飲んでみたくなつて、搜しました所、ドライハーブを入手することが出来、早速入れて飲んでみましたが、苦くて薬っぽい味で、想像したものとは違つてました。色もちょっと違つてる感じでした・・・。  
俺にはハーブティーのよつな、お洒落な飲み物は向いてないのかなとちょっとガツクリしました。

ハーブティー初心者にはどんな物がオススメなのでしょう?

いきなりこんなメール送つてしまい、失礼かなとも思ったのですが  
．．とても気になってしまってついメールを書いてしまいました。  
お忙しそうですし、ご迷惑なら返事を書かずに、放置して構いません  
ので．．。

ほんとうにすみません。  
それでは失礼致します。

フルより

\* \* \* \* \*

返事が来るのは半々の確率いや．．．それ以下かなとあまり自信が  
無かつたが、それから数日して返事が来た。  
キチンとした律義な人なんだなと感じた。

\* \* \* \* \*

フル様

メール、どうもありがとうございます。  
それから焼き菓子をお買上げ下せり、まことにありがとうございます。  
美味しいと言つていただけて、とても嬉しく感動しております。  
お客様の美味しいの一言が私の励ましと、頑張る力の源です。  
これからも一生懸命頑張つていきたいと思つております。

ハーブティーの質問ですが、フレッシュハーブとドライハーブでは、  
味や抽出したお茶の色合いがが違うと思われます。

また、入れる分量によって色や味が違ってきます。

それ以外に、あまりハーブティーに馴染まれてない方ですと、美味しく感じなかつたりもされるかもしれません。

お好みの味がござりますので、オススメといつのも難しいのですが・・・。

ハーブティーには属しませんが、紅茶にハーブをブレンドしたり、香りを添加した物も売られてあります。

アールグレイティーは茶葉に”ベルガモット”の柑橘系の香りをつけたものです。

他には、T社のレディ・・・ティーには、アールグレイをベースに、オレンジ ピール、レモン ピール、そして、ブルーの矢車菊のドライの花びらがブレンドされています。

ほんの少し、ハーブの雰囲気を味わえるかしらと思つてます。そちらをお試しになつてみてはいかがでしょうか？

他には、ハーブティーに、はちみつや甜菜糖シロップなど甘味料を入れて飲むと飲み易くなるかもしれません。

もしハーブティーに色々興味がおありでしたら、少量ずつ色々な種類をお試しになつてみて、お好みの味を搜すのも手かもしれません。ティーバッグになつている物が便利かと思います。

余談ですが・・・。

面白いハーブティーがございます。

マロウティーにレモン汁を1滴たらすと、不思議なんですよ！ 答えは・・・。お試しになつて見て下さー！（^o^）

長文失礼致しました。

今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。

海藤 杏樹

\* \* \* \* \*

顔マークがなんだか凄く可愛らしくて嬉しかった。早速マロウティーのティーバッグを買ってきて試して見た。

カップにマロウティーのティーバッグを入れて湯を注ぐと、濃い鮮やかな紫色になった。

「凄い色だな。」

自然の色とは思えない鮮やかな紫色に驚いた。

そして、ドキドキしながらレモン汁を一滴たらしてみた。

「うわあ。」

一瞬にして、鮮やかなピンク色に変化した。

嬉しくて、嬉しくて。俺はすぐ返事を書いた。

\* \* \* \*

杏樹様

マロウティーの問題ですが、答えが分つて、嬉しくて焦つてメール書いてます。

答えは『ピンク色』ですね。

鮮やかな美しい色に、とても驚いてます。

楽しい問題、ありがとうございました。＼( ^〇^ )／

フルより

\* \* \* \*

この事がきっかけとなり、俺達は度々メール交換するようになった。  
..。

(第5話に続く)

## 第5話 杏樹の謎

杏樹の店は店舗兼住居になつており、店舗スペースは、8畳大の店舗スペースとその右隣が、8畳大の焼き菓子工房。

工房から店舗奥のプライベートスペースに出入り出来る。

プライベートスペースの間取りは、8畳大のダイニングキッチンに、6畳大の寝室兼書斎、トイレ、洗面所、バスルーム、3畳大の作業スペース、ダイニングキッチン端には急傾斜のはじご階段がかかっており、12畳大の屋根裏部屋に行ける。

屋根裏部屋は場所的には店舗と焼き菓子工房の上の部分にあたり、天井は屋根の形に合わせた急傾斜の形をして、こげ茶色の塗料で塗つた梁が、いい雰囲気にレトロな味わいを出している。壁面は真っ白な塗り壁で、床にはオークのフローリングが貼られてて、ベッドが置かれている。3畳ぐらいのウォーキングクローゼットもあり、以前は寝室として使つていたが、急傾斜のはじご階段の上り下りがおつこうで、寝ぼけながら階段をおりた時に一度足を滑らせて、上からストンと下まで落し下してしまつた。その時は大怪我した！…と思つたが、たまたま運良く怪我も無く擦り傷ぐらいで済んだが、それからちょっと恐くなつてしまい、寝室に使う事をやめ、今は空き部屋状態だ。

だが、屋根裏部屋にあるベッドの真上に、ちょうど大きな天窓がついてるので、時々星の綺麗な夜にはここで寝て、夜空の星を眺めて楽しんだりする事はある。

この部屋は星を楽しむ以外に、まあステンドグラスのはめ殺しの窓ガラスがついていて、朝方、朝日がその窓ガラスを照らすと虹色の光が部屋に射し込んできて広がつていき、とても美しく幻想的で、杏樹のお気に入りだ。

屋根裏部屋には大きなドーム（屋根から突き出して設けられた採光

用の窓)がついており、このスペースには厚手の大きな板で作った、作り付けの机があり、以前は書斎として使っていた、急傾斜のはしご階段の問題さえなかつたら、なかなか居心地のいい部屋なのだが……。

ダイニングキッチンは、陶器のシンクに水栓金具はアンティークなゴールドに陶器風のつまみ。壁面にはレンガタイルが貼られていて、システムキッチンの扉は白木でカントリー調。部屋中央には、同じ白木のダイニングテーブルにベンチ椅子が置かれている。そのちょうど上あたりにカントリー調のロウソク球シャンデリアが下がっている。

カッピングボードも同じ白木でカントリースタイル。

壁面にはちょっとアンティークな薪が火力のクックストーブが置かれていて、寒くなると、ここで薪を燃やし暖をとったり、色々なオーブン料理や煮込み料理を作つたりする。

すぐ側にはロッキングチェアが置かれていて、冬はここに座つて、ストーブの炎を眺めて楽しんだり、温まりながら編み物を楽しんだり、本を読んだりして過ごす。夜長の季節には、とても居心地のいい癒しの場所だ。

あまりにも気持ち良くて、時々そのまま居眠りしてしまう事もある。

ダイニングキッチンには大きな両開きのフレンチドアがついており、そこからウッドデッキに入り出来る。

そこには、丸い形の白い铸物のガーデンテーブルとお揃いの椅子が置かれてて、背景は奥深い森で鳥の声がさえずり、家周辺の庭はハーブが沢山植えられている、そんな中でお茶をしたり、食事をしたり楽しむ事が出来る。

ブログにUPされている画像はここで撮影したものである。

ウッドデッキにはこけら葺き(木を何枚も重ねて葺いたもの)の屋根が伸びて庇となつており、デッキ端の方は物干し場になつていて、

洗濯場でもある脱衣室からも出入り出来る扉がついており、日中は、風景画の絵の一部のように、杏樹のお手製の服が干されていて、風にコラコラはためいてる。

3畳大の作業スペースは、ソーリングコーナーとして使つており、カントリー調のシンプルな作業机と同色の木の椅子が置かれている。作業机にはロックミシンとミシンが置かれている。

壁面には整理棚があり、沢山の布地や針箱、ボタンやレースや、小物類などが分類事にぎつしりと分けられて置かれている。

その端にはアイロン台とハンガー・パイプがあり、ハンガー・パイプにはヤードセール用に杏樹が作った、リネンやコットンのナチュラルなデザインの服がハンガーにかけられて沢山吊るされている。

この中には注文を受けて作った物もある。

杏樹のナチュラルな服はけつこう人気が高く、最近は注文分だけで作るのが精一杯な状況だ。

杏樹自身も手作りの服をいつも着てるので、杏樹の着ている服をお店で見たお客様が作つて欲しいと頼んで来たりという事もある。

ハンガー・パイプ端の支柱には、手作りのリネンバッグも沢山下がっている。

床には大きな籐籠に、手作りのポーチや、ミニコインケース、ティッシュケース、ペンケースなどなど。手作りの小物類が色々。

本業の焼き菓子以外に、小物や服を作るのに大忙しで、更にブログやメールチェック。

最近睡眠時間が4時間ぐらいしかなくてちょっと体がキツイ。

そろそろ焼き菓子のネット販売は終了しそうとおもつてている。

寝室には、ブリティッシュスタイルのアンティークな木のベッドにナチュラルなファブリックと、その脇にアンティークな英國製のラ

イティングデスクが置いてあり、そこを書斎「一ナとして使つている。

就寝前、ライティングデスクの机の台になる扉を開けて、ノートパソコンを置いて、電源を入れ、机とお揃いのアンティークな椅子に腰かけて、杏樹は頬杖をついてメールをチェックしていた。

「あ・・・また来てる・・・」

ハーブティーの話題がきつかけで、まるでメル友のように頻繁にメールのやり取りをするようになった人・・・。ハンドルネームは“フル”さん。

数日前にネット販売の焼き菓子を購入した人の事で、調べてみた  
・。  
工藤 誠一、住所は東京世田谷区・・・マンション10階・・・。  
きつとこの人に違ひない・・・。

結婚に失敗して、男の人は懲り懲り・・・結婚も恋愛ももう一度としない・・・一人で生きていこうと誓ったから、男性の人とメール交換なんて抵抗が無い訳ではないが、特に下心があるようにも見えないし、真面目そうな雰囲気・・・。

メール内容にそう言う変な兆候が見え始めたら、相手にしないで無視すればいいかなと思いながら戸惑いながら返事を書いている。けれど少し、この謎めいた“フルさん”に興味がわきはじめていた。

結婚はもう懲り懲りだから、恋愛感情ではなく、友情みたいな気持ちというのだろうか・・・。

それにこんな森の中の一軒家では、お客様以外話す人も居なくて、少し淋しい気持ちでもあった・・・。

\* \* \* \* \*

杏樹様

今日、ブログのお知らせを読みました。

近く、焼き菓子のネット販売を終了するそうですね。

東京に住んでいるのでなかなかそちらの店舗には行けず、ネットショッピングで焼き菓子を買って食べる事がとても樂しみでしたので、ちよつと残念です。

ですが、お忙しい身、杏樹さんの体の事を思えば、ネット販売終了も止むを得ないのかなとも思つております・・・。

その時には、頑張つて店舗にまで買いに行こうかなと思つております。

ネット販売終了の事、とても悩んでいる様子が書かれてあります  
睡眠時間4時間はやはり無理しそうだと思います。

ですので、無理なさらずに・・・頑張りすぎないでくださいね。  
ブログに色々辛辣な書き込みもされてるようですが、気にしない・・・  
気にしない・・・。

時が過ぎれば、そんな批判も消えますから・・・。  
何かの時には僕がお力になりたいなと思つてますし・・・。  
ですから大丈夫ですよ!!

フルより

\* \* \* \*

凄く嬉しかった・・・。

自分の身を案じてくれる人が居てくれる・・・例え顔の分らないメールだけの繋がりの人でも・・・。

お店のお客様、製菓材料の取引先の人・・・いろいろ関わりのある

人は居ても、本当は孤独で独りぼっちだつたから . . .

ブログで焼き菓子のネット販売終了の心境をHPしたら、殆どがやめないで欲しいの書き込みだった . . . 。中には怒りを露にする人もいた . . . 中傷的な内容の書き込みもあつた . . . 。

確かに自分に非があると思う . . . 。

始めた事を途中で終わらせてしまうのだから . . . 。

お店を始めて、まさかこんなに反響がすぐに起きるとは思つてもいなかつた。

もしかしたらすぐにお店が潰れてしまつかもしれないと、不安の方が大きかつた . . . 。

あまりにも物事がトントン拍子に順調に運んで行つたので、唖然と驚いている気持ちもあつたし、あまりにも順調すぎて恐い気持ちにもなつた。

でも、これ以上頑張るのは限界 . . . 時には体調が悪くても体にむち打つて頑張つた日もあつた . . . 。

忙しくて、充実して楽しいのだけれど、ほんのちょっと休みたい . . 。

ネットショップの注文が多くてやりくりできない状況にまで來ていた . . . 。

その気持ちを汲んで思いやりのメールをくれたのがフールさん1人だけだつた . . . 。

時々私の事を知つてゐるのかなと少し恐い気持ちにもなつたが . . 今日のメールは本当にありがたかつた . . . 。

「フールさん . . . あなたは、工藤誠一さん？」

聞きたい気持ちだけれど、もし違つていたらとても失礼だと思うし、

個人情報を他人に教えてしまう事になるかもしねり聞けない……。

- - - - 実は、智弘が工藤誠一と言つ名前を使って、いつも焼き菓子を注文していたので、杏樹の思つてゐる人とピタリと当たつていた。.

実はあの隠れ家にしているマンションは、一番信頼の置ける秘書の名前を借りて、秘書名義で購入したマンションだった。  
その秘書の名前が”工藤誠一”実在の人物だ。

- - - - 嬉しくて、杏樹は返事を書いた。

\* \* \* \*

フル様

ご心配下さり、ありがとうございます。

実は私は家族が居ないので、相談する人も、心配してくれる人も居ない身です。

それに結構心が弱くて折れやすいので、思いやりに溢れたメールに心温まり、元気が出ました。

本当にありがとうございます。  
嬉しくて感激してます。

杏樹より

\* \* \* \*

このメールを読んで、智弘は驚いた . . .。

「海藤隆也は君の父親じゃないのかい？ 海藤雅也は君の兄さんじやないのかい？ 家族が居ないって . . .。君はいつたい . . .。」

(第6話に続く)

## 第6話 謎の真相 . . . あの日の記憶 やのー (前書き)

今回の話と次話は、重い内容の話です。  
この言つた表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分「注  
意の上」でお読みになつて下さい。

## 第6話 謎の真相・・・あの日の記憶 その1

智弘は、『家族が居ない』と言つ杏樹のメールが気になつて、杏樹の身辺の事や家族の事など色々調査してみた。

調査結果を見て、驚愕した。

海藤リゾートの正当な後継者は、杏樹ただ1人・・・。

杏樹の実の父親である、かいとう たかひろ 海藤敬博氏は、海藤リゾートの創業者で非常に優秀な人で、敬博氏が社長の頃は環境保全にも力を注ぎ、企業家としても有能で様々なアイデアを生み出し、優良企業で内外からも評価され、会社もぐんぐん成長してあつという間にリゾート業界トップにのし上がった。

ところが杏樹が短大2年の時に、自動車事故で急逝。自家用車で仕事先に移動中、運転手のミスによる単独事故で帰らぬ人となつた。

杏樹の母は、急遽、海藤リゾートの社長に就任したが、元々家庭の主婦として長年家庭を守つてきた人で、会社については全くの素人で知識も能力も無く、誰が見ても無謀な事だった・・・。

そんな時に杏樹の母に接近してきたのが、あまりいい噂の無い成り上り企業”双葉リゾート”の社長、ふたば たかや 双葉隆也・・・現・海藤隆也だつた。

杏樹の母はなんとしても夫の会社と社員達を守りたいとの一心で、双葉隆也と結婚、双葉隆也は海藤姓を名乗り、海藤隆也となつた。そして杏樹の義理の父親となり、海藤リゾートの会長に就任した。海藤隆也は独身だったが、愛人の生んだ息子雅也がいた。

雅也は杏樹よりも6歳年上で、大した学も無く、放蕩息子として有名だった。

その息子を海藤家の子として養子縁組みさせ、社長に就任させた。

それから間もなく杏樹の母は、謎の死をとげている。

朝、女中が杏樹の母の部屋に行つたら、突然死していたらしい。表向きの病名は”虚血性心疾患”とされているが、海藤隆也が汚い手を使って殺害したとか、海藤隆也の本当の姿を知つて、会社を乗つ取られて悲観して自殺したとか・・・様々な黒い噂が流れている。杏樹は母が亡くなつてからすぐには家を出て、高校時代からの親しい友人のマンショニに、ルームメイトと言つ形で智弘と結婚するまでずっとそこで暮らしていた。

智弘と結婚するまで、杏樹は男性を知らない清らかな娘だったから、間違いは起きてはいなかつた様だが、情報では、女性関係にもだらしない雅也が、杏樹の事を気に入り自分の物にしようと事件が起きて、杏樹が家を飛び出して友達の家に身を寄せていたらしい・・・。

この情報を、玖鳳グループの総帥でもある会長、玖鳳翔馬が知らないはずは無い・・・。

恐らく、杏樹が海藤リゾートの正當な後継者であること、そして、海藤リゾートに乗り込んできた、隆也と雅也親子の描いた黒いシナリオはすでに感づいていて、騙されたふりを装つて、海藤親子を失脚させ、海藤リゾートを手中に收める・・・。会長の描いたシナリオは、杏樹と結婚する以前から出来上がつていて、ただそれを実行したまでなのだと今頃になつて気がついた。

海藤リゾートを手に入れたら、俺と杏樹を離縁させ、杏樹を追い出すシナリオも出来上がつていたのだろうか・・・。  
もしそうだとしたら、血の繋がつた祖父だとしても許せない気持ちになつた・・・。

まるで将棋の駒のように、孫の結婚まで自分の思う様に・・・なるて冷酷な人なんだ・・・。

\* \* \* \* \*

杏樹は”フールさん”宛てのメールに『家族が居ない』とつい自分の事を書いて送つてしまつてから、ちょっと後悔した。

「素性もよく知らない人なのに・・・うつかり心を開きすぎてしまつたわ・・・」

そしてあの時の事が、蘇つてきた。

・・・・事故で突然父が亡くなつたのは、短大2年の間もなくクリスマスという頃だつた。

街中にはクリスマスソングが流れ、町ゆく人々は、慌ただしそうな、それでいてちょっと幸せそうな雰囲気が漂つていた。

高速で取引先に向つ途中、路面が凍結してて、車がスリップ・・・。父の乗つていた車は堅牢な外車のリムジンだつたが、運転手と共に帰らぬ人となつた。

ずっと専業主婦として家庭を守つてきた母が、父の代理として社長就任したが、会社の業務については全くの素人・・・それは無謀な事だつた・・・。

あちこち歪みはすぐ起き始めて、社内は混乱・・・。何とか杏樹が短大を卒業してすぐぐらに、言葉巧みに母に接近してきた、同業者の社長、双葉隆也と再婚した。

お嬢様育ちの美しく上品な優しい母に似つかわない、粗野で乱暴で下品で腹の中に黒い物を潜ませているような男・・・。

杏樹は鳥肌が立つぐらい嫌いだつた・・・。

真つ直ぐで思いやりに溢れ優しく、学も教養も高く、品格もあり立派な父とはまるで正反対のような男・・・。

こんな人、父だなんて認めない・・・。

更に最悪だつたのは、その息子・・・。

頭も悪く、品格も無く、杏樹の事を舐め回すようなねつとつとした視線で見つめてきてゾッとした . . . 。

あの親子が海藤家に入り込んできてから、会社はどんどんと傾いて来てしまった . . . 。

企業家としてはやつてはならない卑劣な事に平氣で手を染め、海藤リゾートの優良企業としての信頼は失墜し、結局会社を乗っ取られてしまつて、財産もどんどんと食い潰されて行き . . . 。

その頃、不眠症で精神を病んでしまつていた母は、ある日睡眠薬を大量摂取して、自ら死を選んでしまつた . . . 。

母親が病んできている事は気がついていた . . . もつと私が気をつけてあげてたら . . . 。

母親を守る事も出来ず、守られてばかりだった . . . 世間知らずで非力な私 . . . 。

独りぼっちになつてしまつた杏樹 . . . 。

義理の兄になつた雅也の視線は、更に気味悪い程、杏樹を追い掛け回し、身の危険をいつも感じるようになつた。

用心の為にいつも部屋には鍵をかけ、あの男と2人つきりにならないようにいつも気をつけた。

だがある日の夜、自分の部屋で寝ていた時悲劇が起こつた . . . 。あの男がどういう手を使ったのかは分らないが、鍵を壊して杏樹の部屋に忍び込んできたのだ . . . 。

あの恐怖は絶対に忘れる事が出来ないと思つた。

万が一の為に枕の下に”唐辛子スプレー”を忍ばせていたので何とか逃げ出す事が出来たが . . . 。

逃げ出す為の準備は前もつて用意しておいたので、まとめておいた荷物を持って、すぐに友人のマンションに逃げ込んだ。

その後、秘書を通じて義理の父から結婚の話しが舞い込んで来た。

日本を代表する大手企業、玖鳳グループの若社長……”玖鳳智弘”との結婚……。年は杏樹よりも5歳年上の26歳……。写真付きのお見合いの資料を秘書から手渡されて、学歴を見て非常に優秀で驚いた。そして育ちの良さを感じる上品な美しい面立ち……。完璧を絵に描いたような人だった……。

このまま見つけ出されて、あの薄気味悪い義理の兄に汚されるのなら、この人の妻になつた方がどれだけ幸せか……。それに政略結婚としても、心を込めてこの人に死くせばきっと心も通じ合える事が出来るはず……。

この人と結婚して、一生懸命努力して、幸せになろう……。自分の家族を作ろう……。温かい家庭を……。杏樹は決心した。

(第7話に続く)

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 やのへ（前書き）

今回は血の要素の含む重苦しいシーンが玠れこまか。いつ書いた表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分に注意の上でお読みになつて下れ。

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 その2

玖鳳智弘という人は、写真で見るよりも実物の方が数倍も素敵な人だった . . . 。

その場に居るだけで、背中からキラキラと後光が差すような、強烈なオーラを持つてゐる人だった . . 。

こんな大手企業の、いざれトップとなる人 . . . 結婚の話しも引く手あまただろう . . . 。

なのになんで私に白羽の矢が当つたのだろう . . . 不思議だつた . . . 。

こんなに素晴らしい人なら、もつと条件のいい女性を選びそう . . . 断られるだろうと思つた . . . 。

だから結婚が決まつた時には信じられないような気持ちだった . . . 。

あまり口数の多い人ではなかつたし、何を考えているのかも分らない所はあつた . . . 。

結婚が決まつた時には、私のどこが良かつたのだろうと真剣に考えてしまつた . . . 。

智弘さんの笑つた顔は見た事が無かつた . . . 。

大体いつも無表情で、遠い目をしてゐた . . . それに何処か冷たそうな感じがした。

でも . . . 自分には選り好みしてゐる時間は無かつた . . . 。

あの薄気味悪い義理の兄の手の届かない所に逃げたかつた . . . 本当にあの日の夜の事は恐ろしく、吐き気を感じるぐらい気持ち悪く不快な記憶だった . . . 。

もしあの時、逃げる事が出来なかつたら私は死んでいたろう . . . 。

義理の父に乗つ取られた海藤リゾートにも未練は無かつた。あればもう父の会社じゃない！！

あの親子と同じ姓を名乗つてゐる事も嫌だつた。結婚して玖鳳杏樹として生まれ変わって……幸せになろう。努力すれば……きっと報われて幸せになれるはず。

…………そう思つていたのに……。

結婚してすぐに、甘い考えだつた事が分つた……。

特に会話も無く、殆ど家に帰つて来ない夫……。

ただ自分の子孫を……玖鳳家の後継者を残す為の、道具なんだ。

…………だけど……それでも……子供が出来たら少しは変わつてくれるかもしねりない……。

微かな期待を胸に……耐えてきた。

…………そんなある日、あの義理の父と義理の兄がどんなにもない不祥事を起した。

玖鳳グループの乗つ取りを考えていたなんて……。

それに、法を犯す様な事に手を染めていたなんて……。

海藤リゾートは玖鳳グループに吸収合併されてしまった……。

…………そして突きつけられた離婚届……。

夫であつた智弘さんとは最後に会話を交わす事も無しに、秘書が持つてきた離婚届に署名捺印……。

マンションは数日中に出でいくよつて言われた。

私には何も無くなってしまったと思つた・・・。  
心の中には絶望しか無かつた・・・。

- - - - - あ・・・・・ もういいかな・・・。  
父と母の所に行こうと思つた・・・。

離婚届を書いて、秘書に渡したその日の夜・・・。

気持ちを静める為に、普段飲まないブランデーを一口飲んだ・・・。  
パジャマに着替えて、ベッドに横たわり、ナイフを持つてその手に  
力を込めた・・・。

ビリリと左手首に痛みが走つて、生温い物がパジャマや寝具に染み  
ていいくのが分つた・・・。

- - - - - そのまま寝てしまおう・・・寝てしまつたら、明日には  
父と母に会えるはず・・・。

恐ろしかつたけれど・・・目をつぶつて、心を無にして・・・。

\* \* \* \* \*

朝、窓から射し込む暖かい陽の光が顔に当たり、気がついた・・・。  
昨日カーテンを閉め忘れて、ベッドに入つてしまつたのだ・・・。  
起き上がって驚愕した。  
パジャマも寝具も血で真っ赤に染まっていた。

- - - - - でも、私は生きている。  
結構出血したのと思う・・・ちよつと頭がフリフリするなれど、  
命に別状は無い感じだった。

傷口の血は殆ど止まつてゐる感じだった・・・。

タオルでグルグル巻きにして、傷口を押さえてから、着替えて、寝具も引きはがし、血で汚れた物は全て「ゴミ袋に入れ口を縛つた。

それから窓を開けて空を見上げた . . . 。  
珍しく雲ひとつ無い澄んだ青空 . . . 。あまりにも美しくて、見とれてしまった。

金色に輝く太陽が眩しかった . . . 。  
田をつぶつて、太陽の光を浴びた . . . 。

「あたたかい . . . 」

ポツリと呟いた . . . 。

ああ . . . なんて温かくて気持ちがいいんだろう . . . 。  
深呼吸したら、おひさまの香りがした感じがした。

あの澄んだ青空と、金色の太陽を見ていたら、幸せな気持ちになつた . . . 。

幸せだなど感じてる自分がいる . . . 。  
私の命を救ってくれたのは、お父さんとお母さんじゃなかつたのだ  
らうか？

「杏樹 . . . 何やつてるんだ！－！そんな事しちゃ駄目だぞ！－！ 頑張つて生きなくちゃ！－！」

「そうよ . . . 父さんと母さんが、あなたの事を見守つてるから . . . 大丈夫！－！あなたは幸せになれるから、諦めないで！－！」

あの澄んだ青空はお父さん . . . 。  
あの金色の太陽はお母さん . . . 。

「お父さん、お母さん . . . 」めんなさい。私 . . . もう大丈夫！

！」

一生懸命生きようと思った。

自分は何か努力しただろうか . . . 。

何もしないで流されてばかりだった . . . 。

まだ何も始めてないのに、その前から駄目だと決めつけて諦めて . . . 。

愚かだった . . . 。

ふと、昔、私が酷く気に入つて、父がプレゼントしてくれた軽井沢の森に囲まれたガーデンハウスの事を思い出した。

そして父の言葉を思い出した。

「お前が本当に困った時、これを使いなさいーー！」

そう言つて父から手渡された鍵 . . . それは貸し金庫の鍵だった . . 。

すっかり忘れていた . . . 。そつだこれがあつたんだ . . . 。

私名義の通帳や、あの土地の権利書など、困らないように色々杏樹名義に残してくれた物 . . . 。

ふと父の声が聞えた感じがした . . . 。

「お前に出来る得意な物があるだろ？ . . . 」

私に出来る事 . . . 。

何の役に立つか分らないまま好きで、趣味で習つた製菓学校 . . . 洋裁学校 . . . 。

その他習い事オタクで色々な事を習つた。

「出来るーー私にも出来るわーー！」

杏樹は病院に行き傷口を縫合してもらい、一応2日間だけ入院を勧

められ入院。

退院後そのまま軽井沢に向つた . . . 。

(第8話に続く)

## 第7話 崩壊・・・あの日の記憶 その2（後書き）

重い話しですみません。

なるべく不気味にならないように注意しましたが・・・。  
次話からは、主人公は前向きに歩いていく話しが続していくと思います。

## 第8話 軽井沢へ・・・

杏樹の父が残してくれた杏樹名義の貯金は、かなりの額が入つており、普通に暮らしていくには一生困らない程だつた。

それに、換金すると相当な額になりそうな宝石貴金属類に、優良株数社と投資適格格付優良の海外国債ファンド・・・。あの軽井沢の土地権利書、土地と建物の登記簿謄本もあつた。

これなら苦労しなくて一生暮らしていける・・・。

「 - - - - だけどそう言つ暮らをしていけば、私は全く成長できないし、変わる事が出来ない。

「お父様つたら・・・。一人娘の私の行く末をとても心配して下さっていたのね・・・。

それ程までに心配をかけてしまつていた、そんな非力な自分が情けない・・・」

自分の生活の基盤を作る為に必要な額だけ使わせていただいて、後は自分の生活費は自分が働いて貰おう・・・。

心の中で父に『ありがとうございます。大切に使わせて頂きます』と手を合わせて、貯金通帳だけ持ち出して、後はそのまま貸し金庫に置いておく事にした。

「 - - - - いつかこの貯金から使つた分を補つて、働いて貯金して更に増やせるようになれたらいいな・・・。

自分で稼いで自分の力で生きていく・・・そんな強い人になりたい・・・。

誰にも頼らずに自分の力で生きていける人に・・・。

そんなになれたら、もう誰からも流されずに、人の敷いたレール

の上を歩まされずに、自分の敷いた自分の道を思う様に生きていける。

- - - - そ う な り たい ！ ！

\* \* \* \* \*

杏樹は軽井沢駅すぐ近くにある、家賃3万円の安アパートを借り、そこを当分の間、生活拠点にする事にした。

それから車を一台購入した。

お洒落な商用車としても使えそうな、荷物も沢山運べそうなコンパクトな1600CCのハイツワゴン車。

メーカーはフランス、色はレモンイエロー、黒い縁取りがアクセントで、サンルーフ付き。

後ろは観音開きで、後部席はスライドドア。

- - - - 店を始めようと思つた . . .

土地と家は、ずっと手入れもせずに放置していた状態だったので、庭は草ボーボーの荒れ放題 . . . 家もかなり痛んでいた。

お店は、1人で賄える程度の小規模の焼き菓子のお店と、月2回ぐらい庭で手作りの物を販売するヤードセールを開く事にした。日持ちする焼き菓子をネット販売という事も思い付いた。

色々調べたら、焼き菓子に関しては特に資格という物は必要無い事が分った。ただ、店を開くにあたり「食品衛生管理者」の資格が必要だ。これは1日講習を受けたら取得出来るので心配は無さそうだ。保健所からの菓子製造業の営業許可も必要だ . . .

キッチンは、自宅用と共有は駄目で、販売用専門の食品衛生法に則

つたキッチンが必要になる。保健所に行つて確認する必要がある・。

その前に荒れた庭と、ガーデンハウスのリフォームだわ・。  
それと同時に焼き菓子工房用の厨房も作らないと・。

あれやこれや考えていくと、頭がパニックにならうになる・。  
でも楽しい・。  
杏樹はやらなくてはいけない事を、ノートパソコンに細かく書き記  
した。

「シッ！ 一つクリアして、私の夢を実現させよう・。

……………さうよ・。

……………屋敷を出てから間もなく4年になるんだ・。・。・。私もも  
う25歳か・。・。

杏樹は布団の中で、実父が亡くなつてから、怒濤のよつなここれまで  
の日々を思い起こしていた。

今まで体調が悪くても、何とか頑張ってきたけれど、疲れが蓄積し  
ていたようで今回ばかりは熱も高く、食品を扱っている仕事の為、  
無理しそぎて商品に何かあつたら取り返しが付かないし、無理して  
悪化させてしまっては元も子も無い。

思い切つて1週間休んで、しっかりと体を治して体調を整える事に  
した。

風邪で思って当るのは・。・。・。2日前だったりうか・。・。

年配のご婦人だったが、酷く具合の悪そうなお客様がいて、明日、娘と孫が遊びに来るので是非この焼き菓子を食べさせてあげたいと、頑張って買いに来た様子で . . . 。

熱っぽそうで顔は赤く、マスクもせずに、咳き込みながら、わりと長々と孫の自慢話まで始まつて、ちょっと苦笑気味にそのご婦人の話し相手になつていた . . . 。

こんな自然豊かな森の中で、風邪をひくなんて . . . ウィルスに名前は書いて無いけれど . . . 人を疑つてはいけないけれど . . . あの事が原因かなと思った . . . 。あのご婦人は大丈夫なのかしら？まあ、そんな原因を考えても仕方ないわね . . . 。体を早く治す事を考えないと。

「夏風邪は何とかがひくつて言つけれど . . .  
またついつまらない事をポツリと呟いた . . . 。

呟いても相手もいないから、ただ自分の声だけが部屋に広がつて、消えていくだけ . . . 。

何だか今日はマイナーな事ばかり考えてしまつ . . . 。

お店には『”臨時休業のお知らせ” まことに申し訳ございませんが、店主の都合により1週間お休みさせて頂きます。』の貼り紙をした。

この貼り紙を貼りに行くのもフラフラで、やつと状態だった . . . 。こんな状況なので、病院にも行く気力も起きない . . . 。(途中で行き倒れてしまいそうだわ . . . )

「あ～あ . . .  
また一つ溜息が出た。

普段、忙しく働いている時には、充実してゆっくり考えている暇もないぐらいだが、一人ベッドで寝ている時には、つまらない事をあ

れこれと考へてしまつ。

それに病氣の時には心細く、独りぼっちの淋しさを嫌と言ひほゞ味あわされる。

ブログには、臨時休業のお知らせを載せた。

奇妙なメル友”フールさん”には、『風邪をひいて具合が悪いので、ブログとメールは暫くお休み致します』と書いて送信し、パソコンの電源を落とした。

具合が悪かつたので、手短な文章で、素つ氣無かつたかも知れない・・。

でも、これでもやつと送信した状況だ・・。

風邪をひいてもお腹は空くし、喉も乾く・・。  
だけど起きるのが辛くておっくうだなと思つた。

・・・・・そんな時だつた・・。

庭の門を開けて人が入つて来る気配を感じた。

そして、玄関の前に立つたなと思つたら、ベルが鳴つた。

今日は起きのもやつとと言つ感じで、パジャマを着てゐるし、居留守を決め込む事にした。

だが・・・。

諦めないで何度もベルを鳴らす・・。

杏樹のガーデンハウスの玄関ベルは英國製のレトロなデザインの物で、アンティークなプッシュボタンを押すと、非常ベルのよつこジリジリ音を鳴らすタイプ・・。

普段は古い英國の映画のような、レトロで味わいがあつて気に入つてるし、あのベル音がいい雰囲気に感じるけれど、今日みたいな具

合の悪い時には頭に響いてたまつた物ではない . . . 。

それになんてしつこいのだろう . . . 。

まるで私が家にいる事を知ってる感じにも思える . . . 变質者かな?

そのうちドアをトントンノックし始め「杏樹 . . . 大丈夫か? 杏樹 . . . と自分の名前まで呼び始めた。

いつたいどういう事 . . . 誰なの?

やつとの事で起き上がり、ドアチーンを付けたままでドアを開けた。

- - - - そこに立つている人を見て、啞然としたと言つか震撼したと言つか . . . 頭が真っ白になつた。

「な . . . なんで . . . 」

熱で頭が変になつてしまつて、幻覚が見えてるのだろうか?

「杏樹 . . . 具合が悪いんだろ . . . 君の事が心配になつて来てしまつた . . . 」

そこに立つているのは、あの離婚届を秘書を通じて突きつけてきた元夫だつた . . . 。

「なんで . . . 」

言いたい事は山ほどあるのに、頭が回らなくて同じ言葉しか出て来ない . . . 。

「あの離婚届は祖父の差し金だつたんだ . . . 。すぐに破棄して俺達は離婚していないし、ずっと君を捜してやつと捜し出して、遠くから君の事を見守っていたんだ。

どうやって償おうかずっと悩んでいたし思い続けていた . . . 。

迷惑かもしれないけれど、具合が悪い事を知つて凄く心配で、いてもたつてもいられなくなつて、来てしまつた「

「 . . . . . 」

あまりにも驚きすぎて、何も考えが巡らなくなつてしまつた。

思考回路は完全に停止状態だつた . . 。

これは悪い夢だわ . . . 完璧頭が変になつてしまつたのかもしけないわ . . 。

（第9話に続く）

## 第9話 招かざる訪問者

忘れようと思つて、忘却の彼方に追いやつてしまつた人・・・。そう努力してきた人・・・。  
その人が今、自分の目の前にいる・・・。  
信じられない・・・絶対に悪夢だわ・・・やっぱり熱が高くておかしくなつてしまつたのだわ・・・。  
なにも言葉が出て来なかつた・・・熱が高い事もあつてペタんとその場に座り込んでしまつた。

「お・・・おい・・・大丈夫か？」  
その幻は、扉を開けようとしてるけれどチェーンがかかつているので容易には開かない。

・・・と思ったのに、この幻は容易に手を伸ばしてヒヨイと難なくチェーンを外し、家に入つて來た。

『うそ・・・』

やつぱり幻だ・・・病氣の時には嫌な夢を見る事があるけれど、これは悪夢だ・・・。

だから熱が下がつたら、この悪夢は消えるはずだ・・・。  
そうよ・・・目が覚めたら消えているはず・・・。

でも少し変・・・離婚した当時の元夫とは少し違つてゐる・・・表情も柔らかになつたし、接し方も優しいし、何よりいつも目を合わせなかつた人なのに、ジツと私を見てきて目を離さうとしない・・・。

それに・・・あの時よりも年をとつた気がする・・・私があの時から4年弱年をとつたのと同じに、この人もそのぐらい年をとつた感じだ・・・。

なんだかだんだん力が抜けて、意識が遠のいていつた・・・。

----- 気がついた時には病院のベッドにいた。

「お . . . おい . . . 大丈夫か . . . 」  
またこの悪夢の元夫が現れた . . . やはりまだ夢の中なのね . . .

私の寝ているベッドの側で、私の顔を覗き込んでいる . . .  
ああ . . . でも、こうやって真っ直ぐ顔を見られた事ってあつたか  
しら？こんな心配そうな表情も初めて見た顔だわ . . .  
相変わらず血統の良さを感じさせる綺麗な顔 . . . だけど . . . と  
ても憎らしい人だわ！！

「しつこい人ね . . . 早く消えて！！ 許可もなしに人の夢の中に  
勝手に出て来ないで！！」

もういい加減目の前をチヨロチヨロされるにもうんざりしてきた。  
あなたは私の記憶の中から抹殺した過去の人なのよ！！  
私の許可なしに、勝手に夢の中にして来て！

「おい大丈夫か？これは夢じゃないぞ . . . 熱で頭がボツとしてる  
のか？」

「えつ？！」

手を伸ばして、元夫の顔に触れてみた . . . 妙にリアルな感触 . . .

夫のほっぺをつまんで捻つてみた . . .

「あいつたたたたつ . . .」

悲鳴を上げる声がリアルだ . . .

うそ . . . これって現実の事なの？

「うそ・・・。本物？」

熱っぽくて涙目になつた瞳を凝らしてジッと見た。

「ああ・・・」

頬を擦りながら疚しそうな表情で、元夫が答えた。

「何で・・・何で私の事・・・知つてゐるの？」

「お前とメールをやり取りしてた”フール”は俺なんだ・・・。大ばか野郎のフールさ・・・」

悪い事をした時の子供のような顔をして、少し上目遣いで杏樹の顔色を伺いながら、智弘が答えた。

「ええっ・・・」

またまたショックだつた・・・。

本当にこれは現実の事なの？ こんな事つて信じられない・・・。

愕然として、力が抜けた・・・。

これなら悪夢であった方がどれだけましか・・・。

「本当に・・・ゴメン・・・」

頭をペコリと下げて、平謝りする元夫・・・。

そう言えばあの離婚届は破棄したと言つてた・・・という事は、この人は”まだ夫？”悪夢だ・・・最悪の悪夢だ・・・。

変だと思つてた。お店をオープンするに当たり、家をリフォームして、庭を手入れして、許可を取得して、やつとオープンと言う時に、そのままにしておいた住民票をここに移動した・・・。離婚して2年半程の年月が過ぎていたのにも関わらず・・・まだ籍は抜けてなかつた・・・。

だが、私の事などどうでも良くて、届けさえも適当な扱いにされるんだと、そのうち出されるだろうと思つてあまり氣にもとめてな

かつた . . .

この人には離婚の意志がない？まだあの悪夢のような生活を望んでるって言つ事？

なにも言葉が無かつた . . .

「先生の話しだけで、風邪だそ�だが、疲れがたまつていて体の免疫力が低下してた為、高熱が出たそ�だ。

少し脱水症状を起していたそうで、抗生素と解熱剤を打つたからもう大丈夫でしようつて . . . 。だから、今してることの点滴が終つたら、家に帰つてもいいそ�だ . . . 。後は家で安静にしてるようになつて . . . 。

ここで無理したら肺炎を併発する可能性もあるから、くれぐれも無理しないようにと言つてた . . . 。

俺が側にいるのは不快に思うかも知れないけれど、少しでも償わせてもらいたいんだ . . . 。

杏樹が元気になるまで看病させて欲しい . . . 許可しておくれ . . .

「

(ええつ . . . 嘘でしょつ！) と思つた . . . 。

だけど本当に具合が悪くて、喧嘩してるような気力もなかつた . . .

許可するとも、ここから立ち去れとも言えず、ただ黙つていた . . .

それに . . . 賴る人が居なかつた . . . 。

「分りましたけど . . . 私 . . . もう夫だなんて思つてませんから . . .

「 . . .

「でも、俺は別れるつもりはないから。君が許してくれるまで、側で償つつもりだ . . . 」

側にずっといるつもりですって！！

「償うのなら、私の目の前から消えて下さい……」

「死ねって事なのか？」

ちょっと冷や汗を垂らすような、驚いたような深刻な顔をした。

「じゃなくて……東京に帰つて下さい……私が元気になつたら……」

今は、情けない事にあなたの助けがなければ動けない状態なので、看病は許可します」

私自身なんて勝手な言い分だらうと思つたけれど……本当に助けが必要だつた……。

それにこんな事以上に元夫は身勝手な振る舞いを続け、私をズタズタに傷つけて……それに比べたら大した事じゃないわよね。

「償うけれど、君の側から消える約束は出来ない……。

ずっと君の側で、償うつもりだ……。会社の辞表も出して来た……と言つても、社長が辞表と言つのも変だが……。

会社は副社長をして來た俺の右腕と、側近に後を頼んで來た。

会長には社長退任の旨を伝えて、勘当を願い出た……まだ正式勘当はされてないが……全て捨ててここに來た……」

唖然とした……なんて言う人なんだろう……この人本当に”

“フル”だわ……。

- - - - 確信した……。

「まあ……先々の事は、杏樹が元気になつてから話し合おう。とりあえず、看病の許可は貰つたから……点滴も終つたし、外して貰つて家に帰ろう」

・・・・・なんだか心なしかこの元夫がウキウキしてゐるよひにも見える・・・。

「あ・・・看護師さん！・・点滴終つたので、外して下さーい！・・・」

・・・・・やつぱり、浮かれてるよひに見える・・・。

「早く家に帰らうな・・・」

・・・・・初めて見た気がする・・・元夫のほほ笑みを・・・。  
一瞬天使の微笑みのように見えて、そんな風に思つた自分にゾワッ  
とした・・・。

今は病氣だから、我慢します。だけど元気になつたら・・・ただじ  
やおかなかから・・・。

やつと私が築き上げた安住の聖地から、この悪夢を追い出さないと  
・・・。

(第10話に続く)

## 第9話 招かざる訪問者（後書き）

人間らしい温かな家庭と愛を知らない夫は、人の心の読めない超天然なのではないでしょうか？

逆に、杏樹を通して人らしい温かさと愛を取り戻した時、本当の姿は無邪気で素直で一途な子犬のような人なのがもと予感します。（笑）

## 第10話 献身

「横抱きと、おんぶと、車イスどなつがいい？」  
無邪気な顔をして、この愚かな夫はそう言った。

「えつ・・・・・！」

この話には点滴が終つて家に帰れる事になつたので、病院の外に駐車してある車までじうじうって行くかという話である。

「歩けますから大丈夫です」

そう言って起き上がつたが、平衡感覚が麻痺してしまつたのか？なんだかフラフラする・・・。

「お・・・おい・・・。無理して倒れて怪我したらどうするんだ！  
！決められないのなら俺が・・・」

そ・・・その手つきは横抱き！-！

「く・・・車イスにします」

触られそうになつたので、慌てて即答した。

お任せしたらどんなでもない事になりそうだわ・・・慌てて一番マシン車イスをセレクトした。

（ああ・・・まったく・・・。風邪をひいた自分を呪いたい気分だわ・・・）

だけど・・・車イスをセレクトしたのにもかかわらず、ヒョイと横抱きで持ち上げられてしまい、結局ベッドから車イスに移るのに、一番セレクトしたくなかった横抱きをされてしまった。

「キャツ！-！」

つい悲鳴を上げてしまつ . . . 。

「落とさないから大丈夫 . . . 」

（違うんです . . . そんなことされると困るんです . . . ）

軽々と智弘に横抱きにされて、車イスに乗せられて . . . なんだか敗北感のようなモヤモヤした気持ちを感じた。

夫の逞しい腕と頬に当たる夫の厚く固い筋肉質な胸板に、ふんわりと香る品の良い心地よいコロンの香りに少しどキッとした。

ああ . . . そんな自分が恨めしい . . . 。彼は確かにモデル級の素敵な容姿とプロポーションを持つてるし、頭脳明晰だと思うけれど . . . 人間的に大きな欠陥を持つてるわ . . . 。それにこの私のザマはなんて . . . 恥ずかしい . . . 恥ずかしすぎるつ . . . 。

智弘が車イスを押し、病院の注射室から廊下に出たら、他の患者さんや付き添いの人気が皆、こっちを注目してる気がする . . . 。

車イスだなんて凄く大袈裟な感じがするし、風邪でふらついて歩けないなんて . . . 情けないし . . . 車イスを押してゐる人物が元夫 . . . いえ . . . 未だに夫だなんて . . . 。

駐車場に着くと、サンルーフ付きの白いセダンの外車が置かれていた。

夫の車に乗るのは初めてだし、免許を持ってて、運転出来る事でさえ知らなかつた . . . 。

（この車だと1千万～2千万クラスだわね . . . 苦労知らずのお坊ちゃんの彼が、会社を飛び出して何が出来るというの？まさか . . . ずっと居座り続けて私の安住の楽園でヒモ生活なんてならないでしううね . . . ）

風邪のせいか、今考へた恐ろしい悪夢のせいか . . . ゾクゾクっと寒気がして身震いした。

(風邪が直つたら追い出そつ・・・絶対に!—)

「さ・・・のうひ」

智弘から介助されながら、車の助手席に乗り込んだ。  
ご丁寧にシートベルトまでつけてくれて、楽なように車のワクライ  
ニングシートを倒してくれた。

(随分と気配りが利くよつになつたのね・・・本当に昔と大違い・・  
・)

車を発進させて少ししてから、杏樹が聞いた。

「ここまで車で? 一人で?」

「ああ・・・。ずっと行きたいと思つて、前々からナビにインプ  
ットしておいたんだ・・・」

(へえ・・・。そななんだ・・・。お店のHPを見たら場所が分るも  
のね・・・)

「杏樹に会えて、凄く嬉しい・・・ずっと会いたかったよ  
含羞みながら、柔らかな顔をして微笑む元夫・・・。

(いえいえ・・・私は歓迎してませんから・・・。絶対勘違いして  
ませんか? あなたの事許してませんから・・・)

これ以上、智弘がどんな頭の痛くなる言葉を言つて来るかと思つと、  
未恐ろしくなつて、眠つたふりを決め込んだ。  
だけどそのうち体が疲れてて、体調も悪くて、本当に寝てしまつた。  
気がついたら自分のベッドの中にいた。

頭を動かしたらチャポンと水の音がして、枕の上に、タオルに包ま  
れた氷まくらが置かれている事に気がついた。  
額の上にもタオルが乗つっていた・・・まだ冷たい・・・。

ベッド横のナイトテーブルには、トレーの上にうつぶせに伏せたコップとORS飲料のペットボトルが置かれていた。

今日病院でもらった薬も置いてあつた . . 。

(へへ . . . 結構マメな人なんですね . . . 知らなかつた . . . )

「起きた? お粥食べない? 手作りじゃなくてドラッグストアで買つてきたレトルト物で悪いんだけど . . . 」

(え . . . お粥? 買つてくれたの?) そういえば、とてもお腹が空いていた。

「じゃあ . . . いただきます」

器に入れて持つてきたお粥は、熱すぎず、冷たくもなく適温だった . . 。

スプンにすくつて口の中に入れたら、なんとも言えない幸福感がジワジワと広がつた . . 。

レトルト物なのに凄く美味しかつた . . 。

「おいしい . . . 」

本心がポロッと出た。

「そう . . . 良かつた . . . 沢山食べて早く良くなれよ。食べ終つたら、薬を飲むんだぞ! !」

「はい . . . 。あ、そう言えば病院で保険証出せなかつたと思つただけど . . . 」

うつかり忘れていた . . . 病院に連れて行つて貰つたのに、支払いの事も、保険証提示の事も . . . 気にならなくてそのまま帰つてしまつた . . 。

「ああ . . . 。保険証出せなかつたから10割で精算してきた . . . 」

「ガーンーーー。きっと物凄い高額ね・・・。痛い出費だわ・・・。

「忘れないうちに、あなたにお支払いしておきます・・・」  
ナイトテーブルの引き出しがからお財布を取り出そうとしたら、智弘  
に制された。

「いらない・・・。俺はお前の夫だぞ・・・なんか水臭いな・・・。  
俺が支払って当然だから・・・」

「だつて・・・もう、離婚して他人になつたつて思っていたから・・・。  
今更夫だなんて言われても・・・そんな風に思えません・・・困  
ります・・・」

その途端、智弘は悲しい顔をした。

(ああ・・・あからさまにそんな顔しないで!! 私が虧めてるみ  
たいだわ!!)

「俺は絶対に離婚しないから・・・やり直しに来たんだ・・・」

「そんな事言われても・・・」

「その事は病気が治つてからゆづくり話し合おう。今は良くなる事  
だけ考えて・・・。や・・・もつと食べないと、元気になれないよ」

「わかりました・・・」

確かにこの話しさ堂々巡りでなかなか解決出来ない感じだ・・・。

「そうだ・・・俺はビニに寝ればいいかな? 床に雑魚寝でも何で  
もいいけど・・・」

「あ・・・。ダイニングの所にはじい階段があると思つたゞ、上に

部屋があつてベッドもありますからセイを使って下さい。バスルームはあそこの扉、トイレはその隣の扉ですから……」

「へえ……そんな部屋が……ベッドまであるんだ……。ま……まさか……恋人でもいるのか?!」

ベッドといつ言葉に反応して、非常に焦ったような驚いたような顔をして、問い合わせるなりに迫ってきた。

(ち・ち・ちよつと・・・顔近いんですけど・・・)  
その突拍子もない一言に頭に血が上った!! だとしたら浮氣だつて言いたいの?

「もう結婚も恋愛も懲り懲りですから……。この先はずつと独身で自分の力で生きていいくつもりですから……」

近すぎる智弘の顔に怯まないよう、ギッと睨みつけた。

「つてことは、ずっと一人だつたんだな……。良かつた……。睨みは全然効果ナシで、勝手に喜んでる……。」

「良かつたつて?！」

「あ……いや……」

いつたい何を考えているのかしら……。早く元気になつて追い出さないと!!

「君が寝るまで起きてるから、用事がある時は何でも言つてね

「もう大分良くなつて来ましたから、寝つけつてもいいですよ」

「いやいや……。先生も家で絶対安静つて言つてたし……。あ……

・・氷まぐり変えないとな・・・

「あ・・・どうも・・・すみません」

(んっ？絶対安静？重病人じゃないつーの！！大袈裟な・・・  
！－－)

「汗かいただろ？着替えた方がいいぞ・・・。後で体拭いてあげ  
ようか？」

「い・・・いいえ・・・遠慮しておきます」

「なに恥ずかしがってるんだ・・・俺達夫婦じゃないか・・・」

「い・・・嫌ですよ～」

布団を引っ張つて田深にかぶつた。

「全くうぶなんだから・・・」

クスリと笑つて、何やら昔を思い出したかのようににやけた・・・。  
「まあ・・・俺もお前しか知らないけど・・・。お互に操を守つ  
たつて事だよな・・・」

(ち・・・ちょっと！－－なに思いだし笑いしてるのは…私の許  
可なく勝手に想像するな！－－)

「じゃあ着替え持つてくるから、後で着替えろよ。えへっと・・・  
着替えはこっちか？」

「い・・・いいです・・・いいです・・・もつ大分良くなりました  
から、あとで起きて着替えますから・・・」

「本当に大丈夫か？」

杏樹は何度もウンウンと頷いた。

この人・・・凄く張り切ってる・・・私が病氣で寝込んでて何となく嬉しそうに見えるのは何故？

ああ体の免疫力よ！早くエンジンがかかつて全開になつて！！早く元気にならないと・・・家を乗つ取られそうな気がするわ！！

（第11話に続く）

## 第10話 献身（後書き）

空氣読めないお節介夫にタジタジの杏樹でした  
・  
・  
・。

## 第1-1話 無期限・観察期間（前書き）

血の要素と残酷的要素を連想させる表現が一部ござります。この書いた表現の苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになつて下さい。

## 第11話 無期限・観察期間

「あなたにはとてもお世話をなりましたし、感謝しますけど……。もう私の中では過去の人ですから……どうか東京に帰つて下さい」

ダイニングテーブルに向かい合わせに座つて今後の事を2人で話し合つていた。

1週間の休養も今日で終り、体調の方もすっかり良くなつて、杏樹は明日からまたお店を再開しようと思つてゐる。

この数日間、本当にお世話になつて、それなのに追い返すような冷たい事を言つて、酷い人だと思うし、身勝手だと言う事は十分分ついていても、もう智弘と一緒に住む理由はなくなつてしまつた……。確かに智弘は飛躍的に、まるで別人のように変化したと思う……。だけど……智弘と一緒にいると、左手首の傷が疼くのだ。勿論もう治つてるから傷の痛みではない。

あの時の苦しみと悲しみが思い出されて、過去に引きずり戻されそうになつて、心が痛むのだ。

なんだかこのままズルズルと彼と一緒にいても良くないと思つた。

「もう昔の俺じゃないんだ……だからもう一度俺にチャンスを与えて欲しい。俺は約束する。もう一度と君を傷つけたり裏切つたりしない！！変わつた俺を見て欲しい……その上で判断して欲しい。頼む！！」

テーブルに両手をついて、テーブルに頭を付けて土下座のように頭を下げた。

「の大企業の社長、俺様的な傲慢な冷たい夫とは本当に別人だ……。

目の前にいるのは……奥さんに頭の上がらない、なんとも弱々し

い夫 . . . という感じ . . .

「だつて . . . 。あなたと居ると、悲しくて辛いあの時の日々を思い出して . . . 。この左手首の傷が疼くんです。この左手首の刻印が消し去れないのと同じに、心の傷も消す事は出来ません」

「本当に悪かったと思つてる。俺は父が幼少期に亡くなつて、母もすぐに俺を捨てて玖鳳家を出て行つてしまつて、家庭とか、愛が何なのか知らないんだ . . . 。妻は子孫を残す為の存在 . . . 子は玖鳳グループを嗣ぐ為の存在 . . . 。そう教育されて来た . . . だから、本当にその点については無知なんだ . . . 。

だが . . . 。玖鳳家の屋敷を追われて、離婚届を書く事を強要された君の事を知つて、慌てて君の住まわされてるマンションに行つた時に、赤く染まつた寝具とパジャマを見て、君の痛みに初めて気がついて、どれだけ酷い事をしてしまつたかやつと分つたんだ . . . 。心が抉られるように痛んだんだ . . . 。

実は冷たい玖鳳家の生活にはうんざりしてた。

初めは結婚も . . . 君はどうせ玖鳳家の財産目当てで結婚した欲深い女、あるいは、何の考えもない親の言いなりで動くお人形のように思つてた。

何もかもうんざりしてて、気がおかしくなる寸前だつた . . . 。

だから俺の一番信頼できる秘書の名義でマンションを買って、そこで1人で暮らしてたんだ。俺が唯一心休める安住の場所だつた . . . 。

時々屋敷に戻るのは、玖鳳家の子孫を残す為の目的だった . . . 本当に君には酷い事をしたと思つてる。

君をどれだけ傷つけてしまつたか . . . 初めて気がついた時心が痛くてしようがなかつた . . . 。

凍つっていた心に初めて温かな血が通つた気がした . . . 。

初めて人としての心を取り戻す事が出来たのだと思った。  
そして、一生をかけて君に償おうと思つた」

彼も可愛そうな人なんだと思つた・・・。だけど・・・。  
「あなたも痛みを持つた可愛そうな人だと言つ事は分りました・・・。  
。だけど・・・そう簡単に元通りなんて出来ません・・・。  
確かに別人のようにあなたは変わりました・・・。だけど・・・。  
もし・・・もし・・・ここに居たいのなら・・・。ルームメイトの  
様な形にしませんか？」

”保護観察”と言う言葉があるでしょ？ もし同居するのなら”観  
察期間”という形で・・・。期限は”無期限”で・・・。  
もし私の気持ちが変化して、あなたとやり直したいと思つた時には  
またやり直すという事で・・・。

でも・・・。その日が来るのは奇跡に近いかも知れませんよ！

”別居夫婦”のような”仮面夫婦”のようなそんな形でもいいのな  
ら、それから私の生活を乱したりしないと誓ってくれるのなら置い  
てあげてもいいですけど・・・。とても勝手な条件だと思いません  
か？こんな形の生活でも良いのですか？”

「俺は意見できる立場じゃないし、側に置いてくれるだけで嬉しい  
よ」

「それから・・・ルームメイトという形ですから、夫婦のように私  
に気安く触らないで下さい・・・。あとは、食費光熱費で毎月10  
万円払って下さい。そうしたら食事は私が用意しますし、掃除洗濯  
もしますから。最後に・・・。私の機嫌を損ねるような事が起きた  
ら出て行つてもらいますからね！――」

「手厳しいな・・・」

智弘は焦ったような参つたと言つような顔をした。だが・・・。

「分った。……その通りにします。……じゃあ是からよりじへ  
お願いします」

「それから。……今月の家賃は要りません。病院代払つてもうひた  
し。……」

「いいのかい？」

「はい。……」

「じゃあ是からよりじへお願ひします。俺。……頑張るから。……  
一生懸命努力して、奇跡を起す事にします」

「。……」

妙に力が入つてて、なんとも言えない。……。  
だが。……智弘を側に置く事になつて、一步彼が勝利に近付いた  
ような嫌な予感がした。……。

もう一度とあんな思いはしたくないし、折角手に入れた自由を奪わ  
れたくない。……。

この穏やかな生活を奪われないよつてしなければ。……。そして。……  
・彼が失態を犯した時、それを口実にいつか追い出そう。……。杏  
樹は固く決心した。

「じゃあ私は明日から仕事がありますので、朝早いのでもう寝ます。  
。……あなたはこのまま屋根裏部屋を使って構いませんから。……。

「分つた。……もし手伝いが必要だつたら、何でも言つてくれ。

店番でも何でもするから。……まあ明日から仕事探しにも行こう  
と思つてるから、出かける事も多いかも知れないが。……」

「。……仕事探し?」――にこにこに本気で居座る気なんだ。……。

「手伝つても、うつ事があつたら、じゃあ言ひますから……」

「ああ……。分つた……」

「じゃあおやすみなさい」

「おやすみ」

杏樹は寝室のベッドに横たわり、溜息を一つついた。

(ああ……。とうとうここに住む事を許可してしまつたわ……)  
その反面少し安心感もあつた……。とても奇妙な気持ちなのだが……。  
· · 明るい日中はいいけれどこんな森の中の別荘地……。ほんの  
僅か、セカンドライフで定住している人も居るが、殆どはセカンド  
ハウスばかり……。

シーズン中は人も多いが、シーズンオフとなると、立派な屋敷も主  
が居ない状況で、ゴースト化した家々が森の中に点在するようにな  
つてしまふ……。

車で少し行けば、この地で生活している地元人の住居もあり、沢山  
のお客様達がお菓子を買いに来てくれるが、ご近所さんと呼べる人  
はすぐ側にはいない……。

夜は不気味だ……。浮浪者のような者が玄関のベルを鳴らす事も  
あつた。

玄関にチャーンを付けていたが、その浮浪者の様な男はチャーンを  
引きちぎつて、家に入つて来そうな雰囲気だった。

とても恐ろしかつた……。思わず夫がいる様な風に演じて大声で  
夫の名前を叫んだ。

その途端、慌てて立ち去つていつたが……。それからは、安全の  
為に夜は門にも鍵をかける事にした。

あの時夢中で夫の名前を叫んだんだっけ……。  
今日から脅えなくてもいいんだ……。

なんて身勝手のかしら . . 。

東京に帰つて！なんて言つておきながら、一緒に住む事にちょっと  
安堵感を抱いてるなんて . . 。

愚かな私 . . 。

- - - - - これからどんな奇妙な生活が始まるのかしら？ あれこ  
れ思いながら、杏樹は眠りについた。

(第1-2話に続く)

## 第1-2話 2人の生活の始まり

お店のある口は、杏樹の朝はとても早い。

朝3時45分に起きて手早く身支度して、大体4時頃焼き菓子工房に行く。

手は念入りに殺菌石鹼で洗い消毒、白い作業着とスッポリかぶる作業帽子、長靴、マスクに手袋着用・・・。

この姿だといつたい誰なのか分らないぐらいになる。

作業終了時に綺麗に掃除しておいたが、始める前にまた作業台など掃除。

そして菓子工房の「ルクボーデ」にプッシュピンで貼つておいた表を見る。

そこには、今日お店に出すお菓子の種類と製作個数を書いた本日の予定表と、時間を無駄にせずに作業できるように組んでおいた、作業工程表が貼られている。

その脇には、いつも取引している製菓材料店、ラッピング材料店、その他の取引店の連絡先と、配達予定日など細かに書いてある。

そして作業スタート!!!

レシピは全て頭の中に入っているし、材料配合は杏樹オリジナル・・・。

甘さはやや控え目で、厳選された材料と、細部まで手を抜かない奥深い味わいがある。

お値段は、決して安いとは言えないが、飛ぶように売れる。

初めはマドレーヌやフィナンシエなど、少し生地を寝かせた方がい

い物からとりかかり、手際よくどんどん作り、寝かせ用のステンレスのキッチンシェルフ棚に並べて、それぞれタイマーをかけておく。その間に、大型冷蔵庫から前もって作つておいたクッキーの種をして来て、綿棒で伸ばして型を抜いて次々と天板に並べて焼いていく。

オープンはプロ用の大型で4段の物が2台ある。8種類の焼き菓子が同時に焼けるシステムだ。

クッキーの焼きが始まった頃に、掛けておいたタイマーが鳴りだし、バターを塗つて粉をふつて大型冷蔵室に入れて冷やしておいた型にどんどん流し込んで、ファインシューとマドレーヌの焼きが始まる。その間にクッキーが焼き上がりケーキクリーのアミに乗せ冷ます。こうやって手際よく、次から次にオープンに入れて行き、出来上がった物は種類別にケーキクリーのアミに並べて冷まし、あつとう間に沢山の焼き菓子達が完成し出す。部屋中には、香ばしい甘い香りが広がる。

菓子の粗熱がとれたらラッピング作業 . . .

手慣れた物で、美味しそうな焼き菓子達が更におしゃれして、食べるのが勿体ないぐらいに素敵に変身した。

店舗ディスプレー用の籠に綺麗に並べて、ショーケースに次々と並べて行く。

1人で切盛りしているので、大量には作れないが、それでも一生懸命頑張つてる。

店舗の陳列が済んだら、前々から注文を受けていたギフトセットを包む。

クッキーの詰め合わせギフトセットが5セット、パウンドケーキ詰め合わせセットが3セット、オレンジシフォンケーキが1セット . .

片付けを終えたら、8時45分に作業終了。

いつもは遅い朝食を食べて、掃除洗濯をして、着替えて10時にお店をオープンさせるが、ダイニングキッチンに行くと、慣れない手つきで智弘が作った朝食が置かれていた。

若干焼きすぎのトーストに、少し焦げた固めのスクランブルエッグとフニャフニャの焼け具合のちょっと油っぽいベーコン・・・。

ミニマートと大きめに千切ったレタスも添えてあった。

智弘はすでに掛けたらしく、コップに庭から摘んできたハーブの花が生けてあって、その下にメモ用紙が置いてあった。メモ用紙にはこうかかれていた。

\* \* \* \* \*

おはよー！ 杏樹の朝はとても早いんだね。驚いたよ。

朝寝坊してしまって、何も手伝う事が出来なくて本当にゴメン。

こんな事ぐらいしか出来ないけれど、迷惑じゃなかつたらこれから朝食は俺を作ってくれ。

洗濯は君の大事な衣類を台無にしてしまったので、やめておいた。。。

俺の衣類は触るのも嫌かもしれないと思って、その辺にあつた石鹼で洗つて干しておいた。（端っこにむさ苦しに物を干させてもらつてゴメン。だけど男物の衣類を干してあると、防犯になるかな？）

秘書に聞いたら俺は会社を罷免されてて、退職金も出ないらしい。。。 （今までのお詫びに君に渡そうと思っていたのに済まない。だが、会長の知らない俺の口座にはそれなりの額はあるから、生活費の事は心配しなくて大丈夫だ。もし、君が許してくれたら一生養うぐらいの蓄えは十分あるので安心して欲しい）

会長は玖鳳の籍からも抜けると息巻いてるらしい。。。願つたり叶つたりだ！！

君が許してくれたら、海藤姓に改名してもと思つてゐ。（海藤リゾートを復活させたい気持ちを持っているんだ）

無職の男が家にいるのも見苦しい物はないと思ひし、自分自身許せない事だ。

出来れば俺の夢だった事にしようとチャレンジしてみようかなと思つてゐ。（済まない。給料はあまり期待出来そうにならないが・・・）兎に角、職探しに行つてくる。

夕方ぐらいには帰つて来るので、これらも宜しく頼みます。

フルこと智弘 より

\* \* \* \* \*

コップに飾つてあつた花は、手でしきつて生けたようだつた・・・。杏樹はもう一度茎の所を花切り鋏で水切りして生け直した。

「本当にあなたは変わつたのね？」

杏樹は花に向つて話した。そしてシンとひとさし指で軽く花をついた。

杏樹は智弘の水の滴る、洗濯物を取り込んで、洗濯機に入れて一緒に洗つた。

「そんな風に洗つて干したら、服がガビガビになっちゃいますよ。

昨日、掃除・洗濯はしてあげますって言つたのに・・・」

そう言へば、夫の洗濯物を洗うのなんて初めてだなと思つた。夫に朝食を作つて貰つたのも初めて・・・。

一緒に住み始めたばかりなのに・・・もう心が揺れ動いている自分に気がついた。

ただ意地で、拗ねているだけのような気がする . . . 。

だけどそう簡単には許してあげられない！！

彼がコップに花を生けるなんて！！明日地球が滅んでしまわないかと心配になって来る。

少し焦げたトーストをかじった。バターがたっぷり塗つてあって、ちょっと脂っこかったけれどなんだか美味しかった。

彼の不器用さと一生懸命さが伝わってくる心地良い味だった。

パサパサのスクランブルエッグは味が薄くて、フニャフニヤのベーコンと一緒に口に入れたらまあまあの味になった。

「あまり美味しいとは言えない朝食だけれど、まあまあ合格よー！」

杏樹はポツリと呟いた。

「一人で頑張るんだって息巻いていたけれど、やっぱり側にいてくれる人が居るのっていいものだわね . . . 」

これからスタートする奇妙な夫婦の生活 . . . 。

最悪でストレスがたまつて変になつてしまわなかと思つていたのに、その逆で心が癒されてちょつぴり期待してると呟つか、楽しみのようない気をする . . . 。

こんな風に思うなんて、想像もつかなかつた . . . 。

「だけどね、すぐには許してあげないから！――」

杏樹のこの気持ちは、フィルムに包んで暫くは隠しておこう . . . 。

「さあ、支度して、お店頑張らないと――」

知らず知らず鼻歌を歌いながら、杏樹はお店に出る支度を始めた。

(第13話に続く)



## 第1-2話 2人の生活の始まり（後書き）

焼き菓子工房の情景は想像で書きましたので、実際とは異なるかも  
しませんが、ご了承下さい。m(—)m

## 第13話 夫の新しい仕事

それから1週間が過ぎた頃だった . . . 。

智弘との関係は、まだ夫婦とまではいかないが、智弘の懸命な努力が実つて、恋人未満のいい友人関係という雰囲気になつた。

朝の早い杏樹の夕食は早い。6時30分に夕食、8時30分から9時にはもう寝てしまう。

今は夕食を食べ終えて、お茶を飲みながら、新しく決まった智弘の仕事の話しをしている所だつた。

「えつ？ 木工家具製作所？」

「ああ。実は昔から物作りが好きでね、家具職人になりたいって憧れていたんだ。俺には生まれた時から敷かれてるレールがあつて、それ以外の道を進む事は絶対に無理だろうと諦めていたんだが、会社も罷免されてひよんな事からチャンスが巡つて來たので、頑張つてみようかと思つてね。

この年からスタートだから、一人前になる頃にはいい年齢になつてるとと思うけど、おまけに給料も安いし . . . 。だけど一生懸命頑張つて、将来は独立して、家具木工房をこの場所で開きたいと思ってる . . 。

こんな俺つて魅力ないかな？更に嫌われてしまふかと不安な気持ちなんだが . . . 」

それを聞いて、杏樹は素直な気持ちで答えた。

「いいえ . . . 素晴らしいなつて思うわ。私だって、不安な気持ちでお店を探りで始めたから . . . 。智弘さんの気持ち、凄く分るの。何でもやってみなければ分らないし、情熱があればいい結果

を出せるかと思つし . . .

「本當?」

「ええ . . . ただ . . . 苦労知らずでお坊ちやま育ちのあなたが、でつち奉公的な厳しい職人の世界でやつていけるのかどうかちょっと心配もあるんですね . . . 」

「うへん。今の意見は微妙な感じだな . . . 。そんなにひ弱に見える? あの偏屈なじいさん(会長)に厳しくされて来たから、根性は人一倍あるし、体力だつて結構あるんだよ俺 . . . 」

「本當?」

「ああ . . . まあ見ていてよー! 期待を裏切らないから . . 。絶対に泣き言は言わないよ」

「ふふふ . . . 。じゃあ頑張つて! 明日からお弁当でしょ? 作つてあげるわ . . . 」

「それじゃあ杏樹の負担が増えてしまうよ。いいよ適当に済ますから . . . 」

「職人は体力勝負でしょ . . . 。お料理なら私の方が得意だし、遠慮しないでいいわよ。毎日膨大な焼き菓子を作つてるんだから . . 。お弁当ぐらい大した事ないわ。だけど朝はちょっと忙しいから . . 。夜に日持ちしそうなお総菜を色々作つてタッパーに入れて冷蔵庫に入れておくから、朝、お弁当箱にご飯とおかずを詰めるのはあなたがやってね! あとは水筒も自分で準備してね」

「うん。凄く助かるよ……嬉しいな……」

「休みはいつ?」

「日曜日と隔週で土曜日なんだが、やつすると両端とは全く休みが合わなくなってしまうね……」

ちょっと萎れ気味の智弘。

「私……お店、土日に休もうかなと思つてるの……。と書いつの  
も、雑誌で取り上げられてから観光客の人が押しかけて、1時間も  
たたないうちに品薄になつてしまつて、今までごひいきにして下さ  
った地元のお客様が購入しにくくなつてしまつてね……。  
だからあえて、土日に休もうかなつて……。それにちょっと年を  
取つたのか、最近少し体がきつくて……。ヤードセール用の小物  
や服を縫う時間ももう少し欲しいし……」  
心の奥にしまつた、智弘との時間も作りたいという気持ちは言わな  
かつた……。

「わあ……じゃあ休日が合つね……。嬉しいな……」

無邪気に笑う智弘……。

杏樹は、まあ……なんて自分の気持ちをはつきり口にする人なん  
だろうと思った。

今は夫の方が素直で真っ直ぐで、私の方が捻くれ者で、素直じゃな  
いなと思った。

一度意地を張つてしまつたら、なんだか素直になれない……。  
仲直りするきつかけを逃してしまつた……。まあ、まだ許してあげるにはちょっと卑すぎるわね……。

「なあ……」

「ん？」

「そのうち木工の腕が上がつたら、俺もヤードセールにちよつとじた家具を出品してもいいかな？」

「ええ……是非。それからここの土地はね……家兼店舗は、猫の額みたいに凄く小さいけれど、土地は2000坪はあるのよ。だから、あなたの工房を敷地内に建ててもいいわよ……」

「ええつ？いいのかい？」

「ええ……」

杏樹はこの事を言ってから、ふとこれってあなたの事を許しますつて言つてる事に近いかしら？とも思つたが……結構鈍感な夫は気づいてない感じ……。

「嬉しいなあ）。あ……それから、車は処分して代わりに軽トラを買ったんだ。木材や工具を運んだりするのに重宝するかなつてね……。もう俺には外車は必要ないからね……」

「あなたって本当に変わったのね？」

「だろ……。俺もそう思つ……。それに今の方が何千倍何万倍も幸せだなつて思うんだ……。今まで幸せだなつて思つた事があつたかなつてそんな気がするんだ……。幸せつて思う事、感じる事つてなんて気持ちいいんだ……心地良いんだつて思うよ。清々しくて……。俺は心の無かつたロボットだったんだつて感じるんだ……」

彼は相当辛い境遇で育つてきたのかなとそんな気がした。お金は有り余るほどある環境だったのに……可愛そうな人。心を何処かに置き忘れて……やつと取り戻したのね……。

4年前の彼は表情もあまり無く一切笑わなかつた……。今は毎日目を輝かせながら、くるくる表情を変えて、ニゴニゴ笑つてばかり……。それにこんなにおしゃべりな人だつたんだ……。凄く素直だし……。人つて分らないなつて思つた。

私の左手首の傷……。  
いまでは痛まない……。その傷の存在を、最近良く忘れてしまつてる……。

ふと杏樹はあの日の金色に輝く太陽と、ビコまでも澄んだ青い空を思い出した……。

金色に輝く太陽は、智弘のニゴニゴ笑つ笑顔に似てる……。  
澄んだ青空は、素直で屈託がない無邪氣な今の彼に似てるわね……。

目の前に金色の陽と、澄んだ青空が……。  
いますぐ幸せなのかなと感じた。それからとても嬉しくなつて、智弘と田を合わせながら、自然と笑がこぼれた。

(第14話に続く)



## 第1-3話 夫の新しい仕事（後書き）

登場人物少なつ！と思いますが・・・。2人の微妙な心理描写を重  
点的に描きたくてこんな感じに・・・。  
話しが進んでいくにつれ、登場しそうな予感がします。m(ー) m  
多分頑固じいさん（会長）も・・・。

## 第14話 穏やかな休日

今日は、お店の定休日を土日にしてから初めての休日・・・。そして、智弘が木工家具製作所に務め始めて初めての休日である。杏樹は、この一週間は慣れない仕事にとても疲れただろうと、智弘を起こさないようにそっとしておいた・・・。きっと熟睡中なのであらう、小屋裏部屋からは何の気配もしないぐらいに静かだ。

杏樹も休日は、たまつた疲れと寝不足を補う為に朝寝坊するが、何せ朝のとても早い仕事なので、物凄く朝寝坊したつもりでも朝8時には目が開いて起きてしまう・・・。

お天気もいいのでシーツ類など大物の洗濯物を洗って干して、普段手の行き届かない場所の掃除を念入りにした。それから庭のお手入れ・・・。

そういうしている間に、智弘もそろそろ起きるかしらと、ブランチの準備をし始めた。

キヤロットスープに、ベーコンとキノコのマフィンとバナナとラズベリーのマフィンに、グリーンサラダと、フレッシュユハーブティ。肉体労働をしている智弘には、焼いたチョリソーソーセージとスクランブルエッグもつけた。

。 今日のハーブティーは、ローズマリー、レモングラス、ミント・・・。

庭から摘んで来てサッと洗ったハーブの水を切つて、適当な大きさに切つて、耐熱ガラスのティー・ポットに入れて、熱い湯を注いだ。少し時間を置いて濃い目に抽出したら、耐熱ガラスのピッチャーに移して粗熱を取つたら冷蔵庫に・・・。

智弘が起きたら、氷を入れたグラスに注いで、アイスで頂こうと思

つてる。

今日はお天気もいいし、ウッドテッキのガーデンテーブルでプランチするのが良さそう . . . 。

杏樹は白い鑄物のガーデンテーブルの上にランチョンマットを敷いて、カトラリーを並べた。

テーブル中央には、小さなグラスの花瓶に庭で摘んだ花を生けた。それから深緑色のガーデンパラソルを広げた。

「準備完了! . . . 」

そういうしている内に、智弘がやっと起きて來た。

「おはよう . . . すっかり朝寝坊してしまってゴメン . . . まだ寝ぼけ眼でバツが悪そうな顔で、頭をポリポリとしながら苦笑した。

杏樹が無期限の観察期間とか、機嫌を損ねるような事があつたら追い出すとか、初めにキツイ事を言つたので、いつも腰が低くて、気を使つてる様子で、可愛そうな感じだ . . . 。

とても疲れてるようなのに、危ない機械も色々使って作業しているみたいで、とても神経も使う大変な仕事だと感じるし、負担をかけてしまつて大怪我に繋がつたらと急に不安になつた . . . 。

「あの . . . もうそんなに氣を使わなくていいですよ。あなたが本当に心底変わった事は分つたから . . . もう怒つてないので . . 。疲れてるみたいだし、仕事で怪我でもしたら心配だし . . . . . もういいかなと思つた。

離婚届の事は、智弘の知らない所で行なわれた事だし . . . 彼もかわいそうな境遇の人だつたのだと言う事も分つたし . . . 自分もいつも受け身で、彼とはなし合おうとする努力が足りなかつたと思う . . . だから . . . 。

それに、彼の事嫌いじゃないし……逆に魅かれている自分に気がついた……。

「え？」

杏樹の一言に、まだ寝ぼけていた頭がはつきり目覚めた様子で、智弘が驚いた顔をした。

「俺とやり直してくれるの？」

「ブランクがあつたので、そ……それは……まだちょっと……。でも、前向きに考えてます」

やり直すと言って、いきなり夫面されても……。まだそんな急速に親密な関係と言つのもちょっと抵抗があった。

「じゃあ、俺達の今の関係は……」

「うへん。交際し始めた恋人同士って感じかしら……。苦し紛れに杏樹が言った。

「友達から恋人に格上げされたんだ……やつたつ。ありがとう……！」

そう言つていきなり両手で手を包めた。

「あ……。触つてはいけなかつた？」

嬉しくてつい杏樹の手を握りしめた自分の行動にハツとして、不味かつたかなと、慌てて手を引っ込めた。

「いのぐりこなら……」

その返事の瞬間、智弘は嬉しそうに瞳を輝かせた。

「抱きしめるのは？」

「まあ……そのぐらーなら……」

その途端、飛びつくような勢いで、ギュッと抱きついてきた。前よりも腕が筋肉質になつて、逞しくなつたなど感じた。

「じゃあ……キスは？」

「か……考えておきます……」

恥ずかしくてイエスと言えなかつた……。ちょっと微妙な気持ち・許してあげたいような、まだ早いかなと思つたり……。

「出来るだけ前向きにお願いします……」

もつ一生離れたくないよつな雰囲氣で、いつまでも抱きついている智弘。

凄く切なくて淋しくて、申し訳無くて、嬉しくて……。色々感情が次から次に溢れてきた。

「そ……そのうち……。わ、早く食べましょ……」「……外ですし……」

いつまでも抱きしめているので、こんな外でちよつと恥ずかしい……。定休日だと知らずに店にお客さんを見えたらいと懲りつと心臓が凍りつきました。

「あ……うん。家でまた抱きしめてもいい?」

やつと解放してくれたけど、名残惜しそうに照れながら言った。

「また後でね……」

そんな彼がちよつと可愛らしく感じた。

本当に……シッポを振つて戯れついてくる子犬みたい……。

智弘は嬉しくて嬉しくてしょうがなかつた……。

「わあ . . 。俺 . . 感動で胸がいっぱいだ . . 。だけどお腹はペコペコに減つてるとこだね . . 」  
智弘の満面の笑顔が、外の太陽の光に照らされて、更にキラキラと輝いて見えた。

「ふふふ . . 。早く身支度して ! ! 頭跳ねてるし . . 。あなたが身支度してる間に、テーブルにご馳走を並べておくから . . 」

「うん。なあ . . . 」

「ん?」

「折角恋人同士に昇格したから、君とデートしたいんだけど . . . 」

「デート?」

「うん。折角軽井沢に住んでるし、2人で森の中をサイクリングなんてどうかな?」

「うわあ〜すてき〜 ! ! って言いたい所なのだけど . . 。私は恥ずかしい事に自転車に乗れないの . . . 」

「じゃあ今度自転車に乗れるようにコーチしてあげるよ . . 。とりあえず今日は、レンタサイクルで2人乗り自転車を借りよう ! ! 」

「それ . . 。私でも大丈夫?」

「二人乗り自転車(タンデム車)だと、自転車の乗れない人でも大丈夫らしい . . 。チャレンジしてみよつよ」

「分った . . 。考えてみたら、観光地に住んでるのに、あまり散策とかした事がなかつたわ . . 。頑張つてみる！」

「よひし……楽しみだな」

「うん」

2人で軽井沢“テート” . . 。こんな展開になるとは . . 。でも、人は時に回り道や過ちを犯しても、遠回りしても、もう一度やり直すと言う事も可能なんだ . . 。

杏樹はそう思った。

もう一度 . . . スタートからやり直してみよう . . 。そして、一步一歩前進して、修復出来ればいいなと思った . . 。青空のように澄んだ広い心で . . . 太陽のよう、キラキラと明るい心で . . 。

(第1-5話に続く)

## 第14話 穏やかな休日（後書き）

二人乗り自転車（タンデム車）は、走行を認められてない地域も多い様ですが。物語ですので可能という事にしておいて下さい。

m ( ) m

## 第15話 2人で軽井沢デート

「よーし……行くぞ……」

レンタサイクル店に行つて、2人乗り自転車を借りてこれから軽井沢サイクリングに出かける所だ……。

「なんか恐いわ……」

今時珍しいかもしねないが、杏樹は自転車に乗れない……。  
今まで乗ろうとも思わなかつたし、その必要もなくて乗れない人になつてしまつた……。

自転車に乗る感覚と言つのが全く見当もつかないし……。ちょっと恐怖……。

「大丈夫！！俺を信じて！！ なんて……まだ俺の事、信じきれないかな？」

ちょっと苦笑しながら、杏樹をチラと見た。

「う……ううん。信じるから安全運転でね！！」

決心したような真剣顔で、智弘を真っ直ぐ見る杏樹。  
ちょっとすがるような目にも見える……。

信じると言つてくれたその言葉に凄く感動して、明るい笑顔で杏樹に笑いかける智弘。

「飛ばしたりしないし、大丈夫だよ！！ 俺が漕ぐから、杏樹はペダルに足を乗せてるだけでもいいからね。漕げそだつたら漕いでくれ。俺がブレーキをかけて停車したら、足を地面につけて、自転車が走り出したらペダルに足を乗せるんだよ」

「停車中は足を地面に着く、走り出したら足はペダルね……分か

つたわ！－！」

教習所の講習を受けてるようすに真剣に、杏樹は言われた事を頭の中で繰り返すように頷きながら繰り返した。

2人で自転車にまたがつていよいよスタートだ・・・。  
最初の目的地はから松林の森を抜けて、アンティークな造りの古めかしい純西洋式ホテル。

「じゃあ行くよ・・・。」

「は・・・はい！！」

自転車が動き出した時、杏樹の心臓は口から飛び出しそうな緊張感だつた・・・。

智弘が漕ぎ始めて、自分の足がフワコと浮き上がつたり、慌ててペダルに足を乗せた。

これが自転車に乗つてる感覺なんだわ・・・。

「なんか不思議な感じ・・・風を感じると言つか・・・ふわふわ道路を滑つてるような・・・楽しい・・・」

杏樹は目を輝かせて、喜んだ・・・。

「フフフ・・・そーカい？面白いだろ？」

「うん！－！楽しいわ！－！」

屋敷にいる時には智弘は、背広姿とか、普段着でも高級ブランドのシャツやポロシャツにブランド物のパンツ姿が多くつた。  
まあ、殆ど屋敷にいなかつたし、会う機会も少なかつた事もあるし、  
彼に対しても程関心も高くなかった事もあるのかもしれない・・・。

だからなのか、あまり彼の体のシルエットとか気にした事がなかつたし、今まで分からなかつたし、気がつかなかつた . . 。

今日のよつこラフなTシャツにジーンズだと、体のシルエットが気になる . . 。

広い背中に大きな肩幅 . . それに筋肉質で . . 。

ちよつと逞しさと男らしさを感じてる . . そして心が時めいでる . . 。

首筋に浮かぶ汗の粒が . . 汗で濡れたうなじの髪の毛が . . ちょっと男性のフェロモンを感じると言つか . . 心がちよつとゆらめく感じ . . 。

そんな気持ちを悟られないよつこ . . 杏樹は、一生懸命ペダルを漕ぎ始めた。

「杏樹が漕いでくれると、ペダルが軽くなるよ . . 助かる . . 」

「本当？ 私って結構力持ちなのよ」

「うんうん . . 憂い憂い . . だけど頑張りすぎると後で足が筋肉痛になつて、悲惨な状況になるから程々にな . . 」

「あなたこそ大丈夫？ 私って結構重いわよ . . 」

「軽い軽い！ 平氣平氣！ 僕ぞー。こう見えても自転車少年だつたんだ . . 唯一の癒しつて言つかね . . 」

あんな堅物じいさんの、「冗談のかけらもないような堅苦しい厳しい躰けを受けて育つてきただろ？」時々発狂しそうに心が悲鳴を上げそうになつてさ . . そんな時には自転車に乗つて、遠出してた . . 。

後でじいさんにキック叱られて、時には殴られもしたけど、全然構わなかつた。どんな日にあっても自転車に乗りたくて、乗りたくてたまなくてね。自転車に乗つてると、自由を手に入れた気がしてた。

自転車であちこと冒険に出かけても、ある時は家出して、一晩公園で野宿したり。

留学してじいさんの日が行き届かなくなつたら、学校の野郎仲間と一緒に泊まりで自転車の旅に出かけたり。楽しかったな。

」

「まあ。ちょっと意外だわ

「でしょ、なんだかひ弱なお坊ちゃんって感じに思つてなかつた？」

「うそうそ。そいつってた

「ひつじ。俺つても、結構自然とかアウトドアとか。いつ言つ事に憧れて好きでね

「素敵ね

「なあ

「ん？」

「杏樹が自転車に乗れるようになつたら、自転車2台で遠出しないか？キャンピングカーに自転車積んで遠出もいいけどね旅先でサイクリングを楽しむとか。あ。これ俺の勝手な妄想だから、嫌だつたら拒否つていいいからね

「う～ん・・・。それ楽しそうーーー！」

「うわっ！嬉しそう返事だなーーー！」

2人で風を感じながら、キラキラ縁に輝くから松林を自転車で走つて・・・杏樹は至福の一時を感じた・・・。

そして思つた・・・自分の負けだつて・・・。

「智弘さんずるいわ・・・」

「えつ？」

何か杏樹を怒らせたのかなと思って、智弘はブレーキをかけて自転車を止めて、振り返つて心配そうに杏樹の方を見た。

「なんかいけない事したかな？」

「ううん・・・。もう私の負け・・・。あなたの事凄く好きになつちやつたみたい・・・。離れたく無くなつちやつた・・・」

その言葉を聞いて、智弘は嬉しそうに頬を染めて微笑んだ。

「じゃあ・・・」

「だつて・・・。全く別人になつて私の元に戻つて來るのですもの・・・。するいわ・・・。これじゃあ、あなたの事嫌いになんてなれないし・・・。離れる事も出来ないじゃないーーー！」

「またやり直してくれる？」「

「うん・・・。私の負けだわ・・・。だけどもう一度と私を悲しませないでーーじやないと・・・」

「分かつてゐる . . 。もう絶対に杏樹を裏切らないし . . 。離れないし . . 。すゞく愛してゐる . . 」

智弘は、回りをキヨロキヨロと見回してから慌てて言つた。  
「キスしてもいい？」

杏樹は含羞みながら、コツクリと頷いた。

誰もいないから松林 . . 。

自転車と重なる2人のシルエット . . 後は心地良い優しい風に揺れる落葉松の木のサワサワと音だけだった . . 。

(第16話に続く)

## 第16話 夫婦として . . .

軽井沢サイクリングはとても楽しかった . . . 。

沢山笑い合つて、はしゃいで、喋り合つて、2人で沢山写真を撮つた。

2人でこんな時間を過ごすのは初めてだ . . . そして2人ともこんな幸せな時間を過ごすのは久しぶりだった。

家に帰つて来て、夕食後ダイニングテーブルで寛ぎながらお茶をする2人。

元々夫婦だつた2人 . . . 。だけどあの時は夫婦であつて夫婦じゃなかつた . . . 。

分かち会えば心通じ合うのも急展開といった感じだ。

止まつていた2人の時間 . . . これから本当の夫婦としての時間が刻まれていくのだ . . . 。

「軽井沢に住んでから、ゆつくり観光地を見て回る機会つてなかつたから、今日はとても楽しかつたわ」

色白で日焼けしにくい杏樹は、鼻の頭が真つ赤になつて火照り顔で目を輝かせた。

「俺も凄く楽しかつたよ。明日は2人とも足が筋肉痛かもしれないな」

真つ黒に日焼けした智弘は、嬉しそうに頬杖をついて、杏樹を愛おし氣に見つめた。

「杏樹の鼻 . . . 日に焼けて真つ赤になつてトナカイみたいだぞ」「真つ赤になつた鼻が痛々し氣で気になつてしようがない。

「えつ？ やだ . . . 私、紫外線に弱いから剥けちゃうかも . . . 」

。日焼け止め塗つて化粧したのにな・・・  
鼻の頭を両手で隠して、杏樹が照れ笑いした。

「ちょっと待つて

智弘が氷水で冷やしたタオルを持つて来て、杏樹に手渡した。

「これで暫く冷やしたら、少し良くなるかも・・・。日焼けは火傷と同じような物だからな・・・冷やすのが一番だよ

「ありがと・・・」

智弘からタオルを受け取つて、鼻の辺りに冷えたタオルを当てた。  
「すごく気持ちいい・・・。火照りがみるみるとれる感じだわ」

暫くしてから、智弘が杏樹の隣に椅子を移動させて、顔を覗き込ん  
できた。

「どれどれ・・・良くなつたか見せてみて」

「少しさは良くなつたかしら?」

タオルを外して、智弘に見せる杏樹。

「うーん・・・」

難しそうな顔で杏樹の顔を覗き込んだ。  
その時だった・・・。いきなりキスをして来て「うん。少し赤みが  
引いてきたよ」悪さをした少年のようなイタズラっぽい顔をして笑  
つた。

「キヤツ!!」

驚きの表情をして、杏樹が「もつづー」と苦笑しながら頬を膨ら  
ませた。

「ねえ、今日から一緒に寝てもいい?」

「え？？」

目を丸くして、驚きの顔の杏樹。

「だつて・・・やり直すことにしたんだから、今日から俺は夫でしょ？」

ちよつと甘え顔で杏樹の顔を覗き込む。

その途端クルツと背を向ける杏樹・・・。

「まだ怒ってる？」

背を向けたまま答える杏樹・・・。

「うん。でも、私のベッドとても狭いわよ」

モジモジと照れながら俯いてホソリと言つた。

背を向けている杏樹の後ろから優しく包み込むようにふんわり抱きしめて、杏樹の頭に頬をくつづけて智弘が目を輝かせてこれからの事を語つた。

「そのうち屋根裏部屋を2人の寝室にしないか？ もっと大きなベッドに変えてさ・・・階段は、もっと緩やかにリフォームしよう・・・杏樹が落っこちないようにね。どうかな？」

「うん。素敵ね・・・」

智弘の広い胸に身を寄せるように杏樹もこれからの人間に、あれこれと夢を膨らませた。

「そのうち家族が増えたら、家を増築しよう・・・」

「うん」

「じゃあ仕事頑張つて稼げるよ!」ならないとなー!一生懸命頑張るからね

「うん。期待してから . . . 」

「じゃあ今晚は?」「うん?」

「じゃあ . . . 屋根裏部屋で星を見ながら一緒にはっ」

「うん . . . いいね」

「あの部屋の天窓から見る星は凄く綺麗なのよ . . . 今日はお天気もいいし、天窓を開けて暫く星を見ましょうよ . . . 」

「私ね . . . あのベッドに横になつて、お天氣のいい暖かい日には天窓を開けて星を眺めて楽しんでいたのよ。」

時々スースと流れ星が流れて . . . とても幻想的で素敵なの。サイドテーブルの引き出しにね、星観察用の双眼鏡が入つててね、それで観察してたわ . . . 。

月のクレーターも凄く良く見えるのよ . . . 面白くてついつい夜更かしあちやつて . . . 朝寝ぼけちゃつたのね . . . 足を滑らせて階段から落ちた時には死んだかと思つたわ . . . 」

「大怪我をしなくて良かつたよ。早く階段をリフォームしないとね . . 。かわいい奥さんが大怪我したら大変だから。今日は、一緒にベッドに寝ころんで、星を見よう」

「うん」

お互に「おでこをくつづけて、田と田を見交わせて微笑み合つた。

「杏樹 . . .」

「ん?」

「愛してゐる . . .」

「私も . . .」

\* \* \* \* \*

それから杏樹のお店は午後3時から6時までの3時間のみオープンに変更した。

それでもありがたい事に地元に根づいたお客様は、沢山店に来てくれた。

ヤードセールは月一回だけ開く事にした。その代わりに店舗の端に杏樹の手作りの物を置くスペースを設け、そこで販売する事にした。ヤードセールの事を知らなかつた焼き菓子を買いに来たお客様が、手作り品を気に入つて、焼き菓子と一緒に買って行く事も多く、作つても作つても品薄状態で、地元のハンドメイド好きな人に対するサービスを提供して、素敵な作品達も一緒に販売するようになつた。

それがきっかけで、店舗前にもスペースを提供して、地元の農家の野菜や、果物、花束を販売するようになつた。  
店内では卵や牛乳も置く様になつた . . .。

だんだん何屋さんか分からなくなりつつあるけれど、スペースを提供している特権で、いいお野菜や果物、卵、牛乳などをいつも安く入手出来るし、頂く事も多く、毎月の食費は殆どかからないのじやないかと言つぐらいで、ありがたかつた。

又、地元の人々が沢山集まつて憩いの場所のよつになつて、とても楽しかつた。

杏樹の住居のデッキのガーデンテーブルにもいつも人が集まって、笑いが溢れていた。

お店の時間を変更したのには訳があった・・・。

肉体労働の智弘に、ボリュームたっぷりで、栄養バランスの充実したお弁当を作つて持たせてあげたいし、疲れて帰つて来る夫の為に美味しい晩ご飯を作つて待つていたかつた。

家事も手抜きをしないでちゃんとこなしたかったし、夫が一緒に経済的にもゆとりが出来て利益を求めるよりも、少し仕事をセーブして、2人の時間を増やしたかつた。

近い将来には家族も増えるかもしねれない・・・健康にも気をつけてあまり無理をしたくない。

休日には、厳しい？！智弘コーチの指導で家の前で自転車の練習・・・。

案外とバランス感覚の良い杏樹はすぐに自転車に乗れるようになり、休日一緒に軽井沢を2人でサイクリングが決まり事のようになつた。杏樹のお店のブログにも『旦那さん』という名称で、2人の写真が直々登場するようになり、旦那さんファンが沢山増え、時々月一回のヤードセールの時に手伝う生日旦那さんを見にやって来る人も現れた。

ヤードセールには、旦那さん作のブックエンドや、飾り棚なども販売されるようになり、なかなかの人気商品だった。

\* \* \* \* \*

やがて季節は秋から冬になり・・・。11月には初雪・・・。

12月には一面真っ白な世界に変わつた。

休日杏樹は智弘と一緒に、お店脇に植えてあるとても立派なモミの

木に、クリスマスの飾り付けをしていた。

「昨年は、ハシゴに上って一人で一生懸命飾り付けして大変だったから、とても助かるわ . . . 」

「そうかい？ とても役に立つてるようで俺も嬉しいよ。これはこの辺かい？」

智弘が赤いガラスの飾り玉を持つて、杏樹の指示の下、木の枝につかける。

「そうね . . . いい感じ . . . あ . . . それはもうちょっと左 . . うん。 そう . . . 」

モミの木の根本周辺に、電飾の置物を並べてクリスマスの飾り付けは完成した。

「それじゃあ . . . いよいよ点灯して見るか？」

「ええ . . . 憐くワクワクだわ . . . 」

「いくよ」

智弘が家脇のスイッチに手をかけ、〇nにした。

「うわあ～。綺麗 . . . 」

モミの木や、店舗ガーデンハウスの電飾がキラキラと瞬き、とても幻想的な情景だった。

「本当に見事だな . . . まるでサンタの家の様だよ . . . 」

「ふふふ . . . 本当に . . . うちじゃないみたい。素敵だわ～」

「よし……。早速写真をとつて杏樹のブログに貼りないとな……」

「」

「最近『田那さんファン』が増えてちょっと焼けるわ……」

「焼きもちを焼いてくれるなんて……俺も出世したなあ……。  
だけど俺は杏樹一筋だから……それに杏樹ファンの野郎の方が心  
配だ……。いつもブログで杏樹ファンの野郎に睨みをきかせてる  
んだ！……」

「え？ そりなの？」

「気をつけないと、フールのような奴とメル友になってしまひ……」

「」

「それってあなたじゃない……！」

お互に顔を見合させて笑い合っている時だった……。

東京のナンバーの車が家の前に止まり、中から第一秘書の関谷が降  
りてきた。

とても慌てた様子だ……。

その姿を見て、智弘の顔が険しくなった。

「関谷……。お前には何度も言つただろ？ ……もう戻る氣は無い  
し、それに俺は罷免された身だ。社とは何も関係のない身分だ。こ  
こまでのこのこやつて来るとは呆れるな……」

「」

「社長お願ひです……すぐにお戻り下さい……。会長がお倒れに

なつました」

関谷が血相を変え苦惱の表情で言った。

「えつ……」

(第一~七話に続く)

## 第16話 夫婦として・・・。（後書き）

お気に入りに入れて下さっている読者様&毎回読んで下さっている  
読者様・・・ありがとうございます。更新遅くなってしまふせんで  
した。

やつと1人セリフ付きの登場人物が現れました・・・。  
何やら起きそうな気配です。（^\_^;）

## 第17話 また離れ離れに . . .

智弘は祖父である総帥から、玖鳳家とはもう無縁の者だと縁を切られ追い出された身。

だから総帥とはもう無関係だと、頑なに戻るのを拒んだ。だが、幼い頃より愛も無く厳しく育てられてきたとは言え血の繋がつたたつた1人の家族だ。

本当は、心配で会いに行きたいのではないかと杏樹は思った。杏樹の事を気遣つて、やつと夫婦として心が通い合つたのに、また離れ離れになつて淋しい思いをさせたり、不安がらせたり、心がすれ違つてしまふ事を恐れて、行くのを躊躇しているのではないかと . . 。

- - - 杏樹は思った。

そうだわ . . . 私が彼の背中を押してあげれば、気兼ねなく、おじい様に会いに行く事が出来るだろう。

また引き裂かれるような事をされないか、彼が戻つて来てくれなかつたらどうしようか、色々不安が無い訳では無かつたが、たつた2人きりの家族だ。許される身ではないけれど、私にとつても義理のおじい様 . . .

おじい様も口では強気な事を言つてたが、本当は会いたいに違ひない . . 。

自分の我が儘を通して、彼をここに引き留めて、一生おじい様と会えなくさせてしまつたら、彼は心の中に後悔の気持ちをずっと持ち続けてしまうかもしない。そんな事はしたくなかったし、させたくなかつた。

何と言つてもたつた1人の身内だ . . .

私にはもう血の繋がつた家族は誰もいない . . . だから、会いたい気持ち、淋しい気持ち、心配する気持ちが痛い程分かる。

杏樹はとりあえず、東京からばるばる尋ねて来たのだからと、智弘とゆっくり話しが出来るように、関谷を客間にも使っているダイニングルームに通して、コーヒーとお手製の焼き菓子を出した。

関谷の話しでは、総帥は意識は取り戻した物の寝たきりの状態で、容体も不安定で、いつ不測の事態が起きるか分からぬいような状況だと事だった。

この事が外部には漏れないように、手を打つはあるが、パツタリと姿を現さなくなつた総帥に対しの悪い噂は少しづつ広まり始めているとの事で、更に、会社内部でも混乱が起きはじめており、悪い噂と重なり株価も下落し始めており、このままだと膨大な社員とその家族達が路頭に迷つてしまつ事態も起き兼ねないとの事だった。

杏樹は智弘に、正直な今の自分の気持ちを伝えた。

「智弘さん、おじい様に会いに行つて来て！－会社の方も大変みたいだし、この状況を見過ごす訳には行かないと思うの・・・」

大会社の1人息子・・・。沢山の社員とその家族達の事を無視して好き勝手には出来ない。公人に等しい立場もあるし、責任のようなものもある。総帥が元気な内は、我が儘も通つたかもしれないが、状況が変わつてしまつた。

多くの社員の生活と家族を守る責任がやつぱりあると思つた。

そして、今行かなかつたら彼はきっと後悔する。智弘さんに後悔して欲しくないと思った。

智弘は、心配そうな顔で杏樹を見て言つた。

「杏樹はそれでいいのか？離婚届を書かされ、玖鳳家を追い出され・・・。君がどれだけ酷い仕打ちをされて來たのか？それなのに許せるのか？」

「確かに、色々あつたけど、智弘さんは離婚届を破棄して、私を追

いかけて来てくれたじゃない。そして、今日までとても大切にしてくれたし . . . それで、十分だわ。あなたの温かい優しい本当の姿を知つて、過去の事はもう忘れようと思ったの。と言うか、いつの間にか自然と忘れてしまったわ。あなたを信じてるし、不幸になつて欲しくないし、後悔して欲しくないし、たつた1人の家族じゃない . . . 会いに行つてあげて！－会社の事も放つておけないわ。あなたの力を皆、必要としてるのと思つの . . .

「でもなあ . . .」

「私の事は心配しなくて大丈夫だから。ここであなたの帰りを待つているから . . . 今後の事は落ち着いてから話し合いましょう . . 。

「今後の事つて . . .」

ちょっと不安げな智弘。

「離婚はしないから、私達夫婦よね？だから、これから的事を2人で解決して行きましょう . . .」

「それで本当にいいのか？」

「ええ。もうあなたを追い返したりなんてしないから . . . ずっと待つてるから、安心して行つてきて！－」

それから暫く考え込んでいたが、決心したように智弘が頷いた。  
「分かつたよ . . . 兎に角、総帥の見舞いに行つてくるよ

「本当は、私もお見舞いに行かなくてはいけないのかもしけないけど . . . 会えるような身じゃないから . . . 私はここからおじ

い様が良くなるようにと祈つてゐるわね

「ありがとう・・・俺も、なるべく早く戻つて来るよつとするから・・・」

「無理はしないでね」

「ああ・・・杏樹も昔みたいに無茶しすぎて体を壊さないようになりつけるんだぞ。俺の一番の大切な家族は杏樹なんだからね・・・。その事を忘れないで欲しい」

「ありがとう・・・あなた」

智弘は杏樹から『あなた』と呼ばれて、心が切なく震えた。やつと夫婦らしくなつて来始めた所だったのに・・・。もつともつと一緒に居たかったのに・・・。ほんの僅かとは言え離れたくないような、一緒に東京まで連れて行きたいような気持ちだつた。血の繋がつた祖父の容体の事はとても気になるが、杏樹の事も心配だ・・・。やつと手に入れた大切な宝物・・・離れたくない・・・。

それに何やら嫌な予感の様なものがした。何なのかは分からぬが・・・。見えな不吉な予感と言うのだろうか・・・。

だが、俺は絶対に杏樹とは別れ無いし、杏樹もきっとそうだ。  
2人の心がしつかりしていれば、この先もきっと大丈夫!!・智弘は決心した。

-----翌朝、簡単に支度を整えると智弘は関谷と共に、関谷が乗ってきた車に乗り込んだ。

「こつてらつしゃい」

「ああ・・・なるべく早く戻つて来るから」

「心配しなくて大丈夫よ、待つてるわ」

お互に身を切られるような気持ちだった・・・。

杏樹は思った。

離婚届を書くより強要されたあの時よりも今の方がずっと辛く苦しい。

いつの間にか、自分にとって大きなかけがえのない存在になつてたのね。

でもあの時のような絶望感はない。辛く苦しいけれど、私の所に戻つて来てくれると言つ心の支えがあるから。

待つてるからね。この先の2人の幸せの為に・・・。

1つ1つ問題を乗り越えて、一緒に頑張るつもりで前に進んで行きましょうね。

\* \* \* \*

軽井沢で智弘と一緒に迎える初めてのクリスマスだった。一緒に飾り付けをしながら、杏樹は幸福な気持ちに満たされ、他愛ない小さな夢をあれこれ思い描いていた。

プレゼントは何にしよう?お料理は何がいいかしら?

クリスマスシーズンは書き入れ時で、お店が忙しくて、そんなに手の込んだ料理は作れないけれど、前もってコツコツ準備して置こう。あのストーブでコトコトとビーフシチューを煮込んで・・・。マッシュポテトの山に、ブロッコリー や星形にカットした二ンジングラッセやミニトマトでクリスマスツリー風のサラダを作つて・・・。ガーリックフランズパンに、サーモンマリネ・・・。シャンパンと

赤ワインビッちがいいかしら？

- - - - - だけど智弘はない . . . 。

1人のクリスマスは淋しくて、結局普段通りで何もやらない事に決めた。

小屋裏部屋に続く緩やかな階段 . . . 手すり . . . 。

杏樹が落ちないようにと智広がリフォームしてくれた。

そして小屋裏部屋には、大きめのベッド . . . 智弘がないとベッドがやけに広く感じる。

毎晩、星を眺めながら、あれこれとお喋りしたり . . . 智弘の広い胸と大きな腕に包まれて、安堵の気持ちで眠りについて . . . 。淋しいなと思った。無性に淋しい . . . 。

総帥は半身不随の寝たきり状態となり、意識はハツキリしているそうだが体の自由が利かない体となり、総帥の業務は臨時で智弘が代理で受け持つ事となり、色々残務整理に追われて、ゆっくり電話をする時間も無く、簡単なメールの交換だけの状態が続いている。もう表舞台に立てなくなってしまった総帥から、今までの事を詫びられ、智弘は何度も社の事を任すと頼み込まれ、体調も不安定な状態で心臓も弱っている総帥の体の事を気遣つて、断る事も出来ず、今後の事をどうすればいいのか、困り果てていた。

この事は杏樹にも相談したが、杏樹もどう返答していいのか分からなかつた。

会社を捨てて、自分の所にもどつて来て欲しいだなんて . . . そんな事とも言えない。

沢山の社員と家族、会社と関連のある企業の社員とその家族の生活だつてある。

だけど、もう智弘と別れる事も出来なくなつていた。杏樹自身も智弘を必要としている . . . でも、自分のお店を閉め、ここを離れる事も出来ない。

お店を必要としてくれてる沢山の人達がいる。

自分の熱い思いの籠つたお店 . . . 簡単に離れられない . . .

兎に角、落ち着いたら一度智弘がここに戻つて来て、その時じつくりと話しあつて決めようと言う事になった。

・・・・・そんなある日の事だった . . .

杏樹の店の前に東京ナンバーの高級外車が止まり、中から杏樹と同年齢ぐらいの華やかな美しい女性が降りて来て、お店の中に入つて來た。

「いらっしゃいませ」

「こちにちは、あなたが杏樹さんですか？」

「はい」

「実はお密として來たのではなくて、杏樹さんとお話しをしたくて來ましたの」

「は・・・い」

「実は私、杏樹さんと離婚話が出ている頃、智弘さんの再婚相手として総帥から是非にと望まれた、鷹乃富千晶と申します」

「えつ？」

(第1~8話に続く)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2293v/>

金色の陽と透き通った青空

2011年10月7日19時16分発行